

# 長崎の秘密



David J. Dionisi

デイビッド・J・ディオニスイ

平和教育協会  
(Teach Peace Foundation)

米国・カナダ・日本・英国  
(U.S.A・Canada・Japan・UK)

『長崎の秘密』のドキュメンタリーと本書は、平和教育協会(Teach Peace Foundation)により推薦されています。平和教育協会の基本姿勢の一つは、「全ての人々に、とりわけ意見を異にする人々には、自分達の愛する家族同様に対応しなければならない」とするものです。

本書では、原子爆弾「デブ男」[訳注=長崎に投下されたプルトニウム爆弾は、その外観から暗号名で Fat Man (デブ男)と呼ばれた]が何故長崎に投下されたのか、その真相を明らかにします。本書『長崎の秘密』は、厳密な歴史的記録に基づき、細かく注釈がつけられており、公式に伝えられている記録資料よりも分析的に記述されています。本書と関連ドキュメンタリーについては、真実に対して相対立する意見を尊重します。更に、『長崎の秘密』は、「死の血盟団」[訳注=原文では Brotherhood of Death]の様々な側面を暴いた一連の著書でも論証されています。<sup>1</sup> なお、これらの著書の概要は付録 A に列記してありますので参照して下さい。

本書の著者は、真実を提示することに専心していますので、本書の記述に誤りや追加の資料情報があれば、分かり次第、早急に訂正してホームページ([www.thesecretofnagasaki.com](http://www.thesecretofnagasaki.com))にもそのように更新します。

© Copyright 2014 Teach Peace Foundation

All rights reserved. No part of this publication may be reproduced, stored in a retrieval system, or transmitted, in any form or by any means, electronic, mechanical, photocopying, recording, or otherwise, without the written prior permission of the author. Printed in the United States of America. Images are owned by the Teach Peace Foundation or licensed from copyright holders. Content is protected by the Fair Use Clause of the U.S. Copyright Act of 1976, which allows for the rebroadcast of copyrighted materials for the purposes

of commentary, criticism, and education.

ISBN 978-0-9910548-2-4

Edition date: 5/19/2014

[www.teachpeace.com](http://www.teachpeace.com)

North America & International

1 530 554 7061 (USA)

---

<sup>1</sup> 本書と関連ドキュメンタリーは、インターネット上の <http://shop.teachpeace.com> 又は [contact@teachpeace.com](mailto:contact@teachpeace.com) への電子便(e-mail)で注文できます。

-i-

## 献呈の辞と謝辞

『長崎の秘密』は、素晴らしい勇気を示した二人の日本人に捧げます。伊藤一長氏は、核兵器の使用が国際法に反することを教えました。<sup>2</sup> 永井隆氏は、悪を封じて何千人もの人々を奮い立たせました。<sup>3</sup> 浦上の聖者として知られる永井博士は、「デブ男」と呼ばれた原子爆弾で殆ど壊滅させられた長崎のキリスト教徒社会の一員でした。

著者は、本書執筆にいたる調査研究の過程で援助を受けた長崎原爆資料館の笹野さくら氏らの皆さん、荒木一彦氏、Renzo De Luca 師、和田かおり氏に感謝の意を表します。関連ドキュメンタリーの音楽制作者 Robert E. Bowman 音楽博士及びナレーション担当の内田みよ氏にも謝意を表します。



4

---

<sup>2</sup> 伊藤一長(1945年8月23日～2007年4月18日)は、長崎市長であったが、山口組系暴力団の一員城尾哲彌に背後から拳銃2発を打ち込まれて殺害された。伊藤の前任者本島等(1922年2月22日～現在)も、長崎市長在職中の1990年1月18日に銃撃されて重傷を負った。彼は、1988年12月7日の長崎市議会で「(昭和)天皇にも戦争責任はあると思う」と発言したことから非難や脅迫が続き、遂に長崎市役所玄関前で背後から近付いてきた右翼団体正氣塾幹部の若島和美に銃撃されたのである。

<sup>3</sup> 永井隆(1908年2月3日～1951年5月1日)は、自身の被爆体験について精神的な年代記を書いている。彼の多くの著者は、英語・中国語・朝鮮語・仏語・独語など多数の言語に翻訳されている。

<sup>4</sup> 長崎原爆資料館玄関の標識(平和教育協会2013年写真集より転載)。

## 目次

序言.....	1
1. 死の血盟団.....	2
2. 不屈の都市.....	10
3. 全視眼カルト.....	15
4. キリスト教徒の迫害.....	18
5. 秘密計画.....	20
6. 朝鮮の分断.....	35
7. 暗殺－如何にして秘密が守られるか.....	41
8. 未来.....	43
付録A.....	46

## 序言

第二次世界大戦が終わろうとする 1945 年 8 月 9 日の朝、長崎市民たちは、殆どがやがて起こる大惨事に全く気づかぬまま日常生活を始めた。そこには、強制労働工場の外国人労務者ら、老齢の市民たち、アメリカ等連合軍抑留者収容所の戦争捕虜 400 人余りと彼等を監視する兵士達があり、彼等の多くは浦上天主堂地域周辺にいた。<sup>5</sup> 又、そこには子供を連れた婦女、戦時中にもかかわらず学校で授業を受けていた生徒たち、教会や寺院で会衆の慰安教導に当たっていた諸宗派の聖職者たちがいた。<sup>6</sup>

本書は、何故原爆が日本に投下されたかを正確に説明する最初の物語である。この本は、真実を明らかにすることで核兵器が再び使われるのを防ぐ助けになることを希望して書かれた。先ずは、この現実世界の物語を幾つかの質問から始めたい。

皆さんは、当時アメリカ政府が長崎に一人余りの強制徴用された朝鮮人や 400 人ほどの連合軍捕虜がいたことを知っていたにもかかわらず、原爆投下の目標にしたことを知っていましたか。<sup>7</sup>

皆さんは、1945 年当時の長崎が 500 年以上も日本のキリスト教の中心地であったことを知っていましたか。<sup>8</sup>

又、皆さんは、原爆の開発製造と投下使用に係わったアメリカ政府指導部が終始「死の血盟団」として知られる秘密結社の要員らで占められていたことを知っていましたか。

皆さんも、多くの人々と同様にこれらの大変基礎的な事実を知らなかったとして、以下本書の記述は、真実を明らかにすることで第三次世界大戦と核兵器の再使用を防ぐ助けになることを希望して書かれたものである。

---

<sup>5</sup> ロージャ・マンセル[Roger Mansell]が主宰した調査研究センター[Center for Research, 550 Santa Rita Avenue, Palo Alto, California]の『日本人の下での連合軍戦争捕虜』[*Allied POWS Under The Japanese*]によれば、長崎の捕虜収容所(Fukuoka 14-B "Nagasaki") は爆心地から 1,850 メートル(1.15 マイル)であった。この収容所についての詳細は [www.mansell.com/pow\\_resources/camplists/fukuoka/fuk-14-nagasaki/fuku14\\_nagasaki.html](http://www.mansell.com/pow_resources/camplists/fukuoka/fuk-14-nagasaki/fuku14_nagasaki.html) を見よ。

<sup>6</sup> ウィリアム・クレイグ(William Craig)著『日本の屈服』[*Fall of Japan*, New York: Penguin Books,1979],93 頁。長崎に収容された捕虜らは原爆で殺された。原爆投下後長年にわたる報道出版の検閲が効を奏して、人々は原爆による捕虜の犠牲を知らない。長崎原爆資料館の推定では、60 人から 89 人の捕虜が原爆「デブ男」で殺された。囚人 81 名がいた長崎刑務所浦上支部は爆心地から北にわずかに 100 メートルから 350 メートルの位置にあり、ここでは 134 人が原爆で殺された。関連の資料と写真は [www.theseecretofnagasaki.com](http://www.theseecretofnagasaki.com) を見よ。

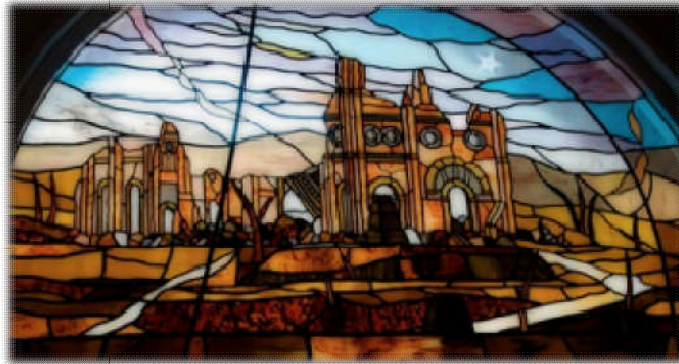
<sup>7</sup> 長崎における原爆被害朝鮮人の追悼碑が、在日朝鮮人人権擁護長崎協会によって 1979 年 8 月 9 日に建立されている。

<sup>8</sup> クレイグ、前掲書、93 頁。

## 死の血盟団

「この種の秘密団体の歴史を書くことは容易ではないが、…それはなされなければならない。何故なら、私が示めすように、この団体は20世紀で最も重要な歴史的事実の一つであるから。」<sup>9</sup>

キャロル・クウィグリー（ハーバード大学・プリンストン大学・ジョージタウン大学 教授）



1945年8月9日、広島に投下されたウラン原爆よりも更に威力のあるプルトニウム原爆が長崎市を壊滅させた時に、7万人以上の人々の命が一瞬にして終わった。<sup>11</sup> この核爆発に生き残った人々の多くは、放射能被爆により更なる苦痛、疾病、そして死と直面することになる。<sup>12</sup> 今日に至るも、この大惨事が何故怒ったのかは殆ど誰も知らない。

米国や欧州の最も古い国々が形成される以前に、すでに組織された権力エリート集団が存在していた。その集団は、諸国の王や女王らをも支配し、彼等自身によるもの以外の境界や法規を認めない秘密結社であった。彼等は、「死の血盟団」として知られていた。

人々が様々な懸念を抱く中で、この集団は陰謀を企み謀略を図って強大化し、長年のうちに彼等の触手は世界の至る所に及ぶようになった。20世紀までには、西洋世界の経済と政治に及ぼす彼等の影響力は非常に強大化して、社会は、選出された代議員たちではなく死の血盟団がほぼ全体的に支配するようになっていたのである。

<sup>9</sup> キャロル・クウィグリー[Carroll Quigley]著『英国系アメリカ人の支配階級』[*The Anglo-American Establishment* (San Pedro, California: GSG Associates, 1949年、1981年)]vii頁。なお、クウィグリーは、別の著書『悲劇と希望』[*Tragedy and Hope*]で「私は、この種の団体を20年にわたって研究してきたし、1969年代初期には2年にわたって当該団体の文書や秘密記録などを調査することを許されたので、その組織網の活動については知っている」(同書950頁)と述べている。

<sup>10</sup> 再建された爆心地の浦上天主堂ステンドグラスの写真、平和教育協会2013年写真集より転載。

<sup>11</sup> 長崎原爆資料館の専門員によれば、当時長崎の人口は約24万人であった。投下されたプルトニウム原爆は73,884人を殺戮し74,909人を負傷させた。被害の詳細については [www.city.nagasaki.lg.jp/peace/english/abm/download/leaflet\\_e.pdf](http://www.city.nagasaki.lg.jp/peace/english/abm/download/leaflet_e.pdf) を参照せよ。

<sup>12</sup> マイケル・アムリン[Michael Amrine]著『大いなる決定—原爆秘史』[*The Great Decision: The Secret History of the Atomic Bomb*, New York: Van Rees Press, 1959], 229頁。



13

フリーメイソンやスカル・アンド・ボーンズ[Skull and Bones][訳注＝髑髏と骸骨の意味で、米国イェール大学を拠点にした秘密結社の名称]など多くの秘密結社の要員らは、三つの世界大戦を起こす計画を立てて協力し工作した。先ず最初は 1914 年、次は 1939 年、そして三番目は何年も後に起されるものであった。<sup>14</sup>



15

彼等は、ロスチャイルド家のような王朝的銀行財閥らの莫大な財源を使って、米国と英国に自分らの邪悪な計画目的を達成するために必要な権力が与えられる内政基盤を構築した。<sup>16</sup>

---

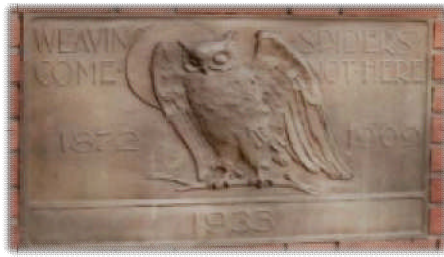
<sup>13</sup> 平和教育協会 2013 年挿絵集より転載。

<sup>14</sup> デイヴィド・J・ディオニシ著、「注意深きキリスト教徒」著作シリーズ第 I 巻、『新世界秩序』[Vigilant Christian I: David J. Dionisi, *The New World Order*, Bloomington, Indiana: Trafford, 2013], 41-44 頁。

<sup>15</sup> 平和教育協会 2010 年デンバー国際空港写真集より転載。4 枚の壁画が 1994 年と 1995 年にチェリル・デトワイラー[Cheryl Detwiler]、ビル・メレディス[Bill Meredith]、ジョン・オクスナー[John Ochsner]、レティシヤ・タングマ[Leticia Tanguma]の協力でレオ・タングマ[Leo Tanguma]によって製作されている。デンバー国際空港のインターネット・ホームページによれば、これらの壁画は世界の平和を夢見る子供たちに見せるものとされているが、オカルトの象徴体系に基礎的知識がありさえすれば、これらが第三次世界大戦の物語を伝える壁画であることは明白である。詳しくは、デイヴィド・J・ディオニシ著、「注意深きキリスト教徒」著作シリーズ第 II 巻、『アメリカの広島を防ぐ』[Vigilant Christian II: Preventing an American Hiroshima]を参照されたい。

<sup>16</sup> 同上書 2-6 頁と 84-86 頁。王朝的銀行財閥らは、日常的に反ユダヤ主義を隠れ蓑に使うので、マーヴィン・S・アンテルメン師の『阿片剤を排除するために—ユダヤ人とユダヤ教を排除せんとする共産主義者と陰謀集団らの徹底研究』[Rabbi Marvin S. Antelmen, *To Eliminate the Opiate: An in-depth study of Communists and conspiratorial groups to destroy Jews and Judaism*, Israel, 1974]及びジェイコブ・カッツの『欧州におけるユダヤ人とフリーメイソン 1723~1939 年』[Jacob Katz, *Jews and Freemasons in Europe 1723~1939*, Harvard, MA: Harvard University Press, 1970]を参照されたい。両著者ともロスチャイルド家とフリーメイソン団との深い係わり合いを説明している。例えば、ロスチャイルド家の大番頭シグマンド・ガイゼンハイマー[Sigmund Geisenheimer] はフランクフルトのユダヤ人フリーメイソン団支部[Frankfurt Judenloge]の創設者であった(アンテルメン著書 114 頁及びカッツ著書 55 頁と 93 頁)。アンテルメンは、ソロモン・メイヤー・ロスチャイルド[Solomon Mayer (or Meir) Rothschild (1774~1855)]がこの秘密結社を使ってユダヤ教を侵害したフリーメイソン団員であったと説明しており、ユダヤ教徒を装いながら本当はユダヤ人の排除を狙って活動している死の血盟団員らの存在を警告している。なお、アンテルメン著書 17 頁では、バビロニア・タルムード聖典 49 頁[Babylonian Talmud, Pesachim 49b]からの一句、「ユダヤ教聖職者に対する野蛮なユダヤ人らの憎悪はユダヤ民族に対する反ユダヤ異教徒らの憎悪を超えている」を引用している。





17

1942年9月13日、或る最高機密会議がサンフランシスコの北方75マイルほどの所で行われた。その会議地は、「ボヘミアン・グローブ」として知られ、「ボヘミアン・クラブ」と呼ばれる死の血盟団の偽装団体が所有する森林地の隠れ家であった。<sup>18</sup> このボヘミアン・クラブは、複数の秘密結社が会合して奇怪なオカルト儀式に参加できる排他的な場所となっており、毎年7月には参加者らに「煩勞の茶毘」として知られる生け贄の儀式が行われる。<sup>19</sup>

なお、ボヘミアン・グローブは、これまで血盟団の幹部要員らが世界制覇のために様々な陰謀をめぐらせ計画を遂行するために開く数多くの会合の中心地になってきた。<sup>20</sup> 因みに、1942年9月に開かれた会議の主要な参加者は、ヴァネヴァ・ブッシュと称した血盟団役員によって統率されたS-1執行委員会の委員らであった。<sup>21</sup> これらの男達は、後に日本に投下されることになる二つの原爆

---

<sup>17</sup> 平和教育協会 2013年挿絵集ボヘミアン・グローブ標識より転載。

<sup>18</sup> ピーター・マーティン・フィリップス著『相対的優位性—サンフランシスコ・ボヘミアン・クラブの社会学』（博士論文、1994年）[Peter Martin Phillips, *A Relative Advantage: Sociology of the San Francisco Bohemian Club*, Doctoral Dissertation (1994)] 11頁と <http://library.sonoma.edu/regional/faculty/phillips/bohemianindex.php> を参照。

<sup>19</sup> 「煩勞の茶毘」は、神モレクを表わすフクロウ像を使って行うルシファー信徒[Luciferian][訳注＝ルシファー(Lucifer)は、キリスト教で神に謀反し天上から落とされたと云われる大天使(反逆天使、魔王)の呼称]の儀式である。『闇の秘密—ボヘミアン・グローブの内部』[*Dark Secrets: Inside Bohemian Grove*]と題するアレックス・ジョーンズ[Alex Jones]製作のドキュメンタリーは、この「煩勞の茶毘」儀式を見せている。ジョーンズとカメラマンは、2000年夏にこのオカルト儀式を密かにビデオ録画した。死の血盟団の宗教的側面は、「注意深きキリスト教徒」著作シリーズ第三巻、『9/11事件犯人らのオカルト宗教』[*Vigilant Christian III: The Occult Religion of the 9/11 Attackers*]の中で説明されている。

<sup>20</sup> 1939年10月11日、死の血盟団要員アレグザンダー・ザックス[Alexander Sachs]は、アルバート・アインシュタインからの手紙を手渡すためにフランクリン・デラノ・ルーズヴェルト大統領と会見した。その年8月に書かれたアインシュタインの手紙は、ウラニウムの力を利用して極めて強力な爆弾が作れることをルーズヴェルトに警告したもので、早速ウラニウムに関するブリッグス諮問委員会[Briggs Advisory Committee on Uranium]が設置されることになった。この諮問委員会は、ルーズヴェルトがライマン・ジェームズ・ブリッグス[Lyman James Briggs]に秘密裏に工作集団を組織するよう命じた結果で、1939年10月21日にはワシントンで最初の会合が開かれた。その後1941年5月17日に、ルーズヴェルトは、科学研究開発局[Office of Scientific Research and Development] (OSRD)を設置したが、同年7月1日にはこれをS-1計画に変更した。更に1942年6月17日、ヴァネヴァ・ブッシュの提唱によりルーズヴェルトはS-1計画をS-1執行委員会に変更した。原爆作りの公式話でよく見落とされるのは、ザックスが死の血盟団に仕えていたことである。ザックスは、1904年にリトアニアからアメリカへやって来て、1918年から1921年までアメリカ・シオニスト機構[Zionist Organization of America]で活動していたが、1931年にはウォール街のリーマン株式会社の役員になった。その後、ザックスは、第二次世界大戦中に戦略諜報局特別会議[Special Council for the Office of Strategic Services (OSS)]として活動し戦後「中央情報局」[Central Intelligence Agency (CIA)]となった組織の創設に重要な役割を果たした。OSSは1942年6月13日に設置、1945年9月20日に解散され、CIAが1947年9月18日に組織された。かくして、ザックスは、英国女王よりナイト爵に叙され、サー[Sir]の称号を使えることになったのである。

<sup>21</sup> これらS-1執行委員会委員を以下に略記する。まず、ハロルド・クレイトン・ユリー[Harold Clayton Urey] (1893年4月29日～1981年1月5日)は、アメリカの物理化学者で、重水素の発見などアイソトープに関する

をことになる二つの原爆を開発する「マンハッタン計画」の科学指導部の面々であった。<sup>22</sup>

このS-1委員会は原爆の責任を負う者達と考えられるであろうが、実は、その背後に彼等を支配する格段に強力で影響力のある隠れグループが存在したのであり、このグループ指導部の一人がバーナード・バルーク[Bernard Baruch]であった。



23

バーナード・バルークの父親サイモン・バルークは、医師であったが、アメリカの南北戦争中はロバート・E・リー將軍の幕下で南軍の軍医として務めながら同時にロスチャイルド家のスパイとして活動していた。古代からの数多くの大戦争の場合と同様に、アメリカの南北戦争も血盟団とその広範な秘密結社人脈によって操られていたのである。<sup>24</sup>

先導的業績によって1934年にノーベル化学賞を受賞した。ユージーは、カリフォルニア大学のギルバート N. ルイス[Gilbert N. Lewis]の下で熱力学を研究し1923年に博士号を取得した後、アメリカ・スカンジナビア財団奨学金を受けてコペンハーゲンのニールス・ボーア研究所[Niels Bohr Institute]で研究を続けた。

アーネスト・オーランド・ローレンス[Ernest Orlando Lawrence] (1901年8月8日～1958年8月27日)は、サイクロトロンを発明によって1939年にノーベル物理学賞を受賞したアメリカの科学者で、1940年3月、アーサー・コンプトン、ヴァネヴァ・ブッシュ、ジェイムズ・B・コナント、カール・T・コンプトン、アルフレッド・リー・ルーミス[Arthur Compton, Vannevar Bush, James B. Conant, Karl T. Compton, Alfred Lee Loomis]らがバークレーを訪れて265万ドルかかると推測された4,500トンの磁石を184インチ・サイクロトロンにかけるローレンスの提案について論議した。ロックフェラー財団は、この企画に着手する資金115万ドルを提供した。

ジェイムズ・ブライアント・コナント(1893年3月26日～1978年2月11日)は、アメリカの化学者で、ハーバード大学学長と西ドイツ駐在初代米国大使を務めた。彼は、1916年にPh.D学位を得てハーバード大学を卒業し、第一次世界大戦中は米国陸軍のために毒ガスを開発した。1936年2月に、バーナード・バルークはコナントに指示して好条件でローレンスとオープンハイマーを引き入れさせた。

ライマン・ジェイムズ・ブリッグス(1874年5月7日～1963年3月25日)は、アメリカの工学専門家・物理学者・行政官であった。アメリカが第二次世界大戦に参入する以前に、彼はウラニウム委員会の委員長であった。

エーゲル・ヴォーン・マーフリー[Eger Vaughan Murphree] (1898年11月3日～1962年10月29日)は、アメリカの化学者で、流動接触分解過程の共同発明者として最もよく知られている。

アーサー・ホリー・コンプトン[Arthur Holly Compton] (1892年9月10日～1962年3月15日)は、コンプトン効果の発見によって1927年にノーベル物理学賞を受賞したアメリカの物理学者で、1929年にシカゴでウェルナー・ハイゼンベルク[Werner Heisenberg]と共同研究をした。1941年4月に、戦時国防調査委員会[wartime National Defense Research Committee](NDRC)委員長ヴァネヴァ・ブッシュが、NDRCウラニウム計画について報告する特別委員会を作りコンプトンを委員長にした。1942年6月には、米国陸軍工兵軍団が核兵器開発計画を引き受けることとなり、コンプトンの冶金研究所はマンハッタン計画の一部となった。

<sup>22</sup> 「マンハッタン計画」は原子爆弾を開発製造する事業の暗号名であった。関連した意味合いでは、現在死の血盟団がマンハッタンに或る計画を遂行している。前掲書「注意深きキリスト教徒」著作シリーズ第Ⅲ巻『9/11事件犯人らのオカルト宗教』はこの計画について説明しており、その最も顕著な象徴であり出発点になっているのが9/11事件の跡地に建設中のワン・ワールド・トレード・センター[One World Trade Center]である。

<sup>23</sup> 平和教育協会2013年写真集より転載。1952年1月にニューヨーク市内のバルークのアパートでウィンストン・チャーチル、バーナード・バルーク、ドワイト・アイゼンハワーが会談している写真で、これは1960年に出版されたバルークの回顧録『バルーク—その公職の幾年』[Baruch: The Public Years]の146-147頁に所載。

<sup>24</sup> バーナード・バルーク著『私自身の物語』[My Own Story, New York: Henry Holt and Company, 1957], 8頁。なお、前掲書「注意深きキリスト教徒」著作シリーズ第Ⅰ巻『新世界秩序』は、死の血盟団が自ら支配する通貨制度に反対するリンカーン大統領を抑えようとして南北戦争を画策し戦争資金を提供していたことを説明している。

バーナード・バルークの回顧録によれば、彼の一族は死の血盟団の主要な遺品とされる家族の血統が記された頭蓋骨を保有していた。<sup>25</sup> バルーク一家はユダヤ人であると自称しているが、ユダヤ人であるのに人の遺骨を保有することはユダヤの律法に反しており、奇異であった。しかし、死の血盟団の信条によれば、それは交霊術ないし魔術による死者との対話に必要なのである。



26

もう一つ奇異な事実は、サイモン・バルークが、現在も死の血盟団に仕え、忌まわしく公然と人種差別する秘密結社クー・クラックス・クランにも属していたことである。<sup>27</sup>

もう一つ奇異な事実は、サイモン・バルークが、現在も死の血盟団に仕え、忌まわしく公然と人種差別する秘密結社クー・クラックス・クランにも属していたことである。<sup>27</sup>

息子のバーナード・バルークは、クランの一員ではなかったにしても、隠れた権力エリート集団への父親の奉仕を引継ぎ、そこで享受できるインサイダー取引や人脈操作を通して莫大なウォール街の富を蓄財する報償を受けていた。他の多数の米国市民が所謂「大恐慌」を通して苦しんでいる最中に、彼は大いに繁栄したのである。<sup>28</sup>

バルーク初期の頃の多くの任務には、米国を第一次世界大戦に参戦させる謀略活動に加わり、1918年には戦時産業局を任せられたことなどがある。<sup>29</sup> 1919年には、バルークは、パリ講和会議での主要参加者を務め、国際連盟の創立を主唱した。<sup>30</sup> 又、バルークは、多くの者たちが軍部や民間の指導的地位に昇進するのを助ける役割を果たした。<sup>31</sup> アイゼンハワー大統領は、「私が25年前の若い

---

<sup>25</sup> 同上バルーク著書、3頁。バルークは「私が名前を継承した祖父のバーナード・バルークは、家族の血統が記録された頭蓋骨を遺品として持っていた」と述べている。

<sup>26</sup> オランダのマウリッツハウス王立美術館所在のピーテル・クラース 1630年の作品『ヴァニタス未だ生きる』[Peter Claesz's 1630 *Vanitas Still Live*]により靈感を受けて描かれたとする平和教育協会 2013年作成の挿絵より転載。

<sup>27</sup> バルーク、前掲書『私自身の物語』、32頁。

<sup>28</sup> W・L・ホワイト著『バーナード・バルーク—市民の権化』[W.L.White, *Bernard Baruch: Portrait of a Citizen*, New York: Harcourt, Brace and Company, 1950]、9~35頁。

<sup>29</sup> 同上 47~48頁。

<sup>30</sup> カーター・フィールド[Carter Field]著『バーナード・バルーク—公園ベンチの政治家』[*Bernard Baruch: Park Bench Statesman*, New York: McGraw-Hill Book Company, Inc., 1944]、183~191頁及び202頁。

<sup>31</sup> A・K・チェスタトン著『新しい不幸な支配者たち—権力政治の解明』第5版 [A.K.Chesterton, *The New Unhappy Lords: An Exposure of Power Politics, Fifth Edition*, London: The Candour Publishing Company, 2013]、35頁。チェスタトンは、「現在アメリカ人ばかりでなく他国の人もアメリカで最大の権力者は大統領だと信じている。しかし、バーナード・バルークは、連邦議会の委員会で証拠を示してこの優雅な作り話を退けた。彼は、質問に答えて、戦時中アメリカで最大の権力者は彼即ちバルーク自身であったと明言したのである」と書いている。更に33頁で、チェスタトンは、バルークが財政権力連合[Money Power Cartel]の主要指導者の一人であったとも述べている。要するに、チェスタトンは、バルークが第1次世界大戦中アメリカで最大の権力者であったし、その権力が非公式のものであれ、第二次世界大戦中にもそれが延長されたにすぎないと云うのである。

ことであった」と述べている。<sup>32</sup>



33

第二次世界大戦が進行中の1940年代初期までには、忠実な血盟団員でありながら重要な政治家として日常の役割を遂行していたバルークや他の秘密結社要員らは、原子爆弾の使用計画を細部的に調整する作業に入っていた。

その頃ドイツでは、ヴェルナー・ハイゼンベルクと云う男が、死の血盟団の指示によりナチスの原爆開発を指導していた。<sup>34</sup> 1941年に、ハイゼンベルクは、コペンハーゲンに出かけて、この開発計画の進行状態を著名な物理学者ニールズ・ボーアと論議した。<sup>35</sup> その後、ボーアは、ハイゼンベルクが

---

<sup>32</sup> 同上書、35頁。ドワイト・アイゼンハワーは、バルークが1939年にニューヨークの土地を寄贈してできた公園の開園式に大統領として参加した。この公園「バルーク運動場」[Baruch Playground]は、マンハッタンの「バルーク広場」[Baruch Place]と「マンジン街」[Mangin Street]の角にある。アイゼンハワーがユダヤ教を拒絶しつつもユダヤ人の血筋でありボヘミアン・グローブの儀式にも参加していたことなどは、彼が世俗的な権力を獲得するのに大いに助けになった。アイゼンハワーは、長年バルークの子分であり、陸軍少佐の地位から成り上がって第二次世界大戦時の最高司令官に昇進し、終には大統領(1953～1961年)にまでなったのである。更に、アイゼンハワーの「25年前の…」の一文を理解するには、「恩給軍隊」[Bonus Army]についての概略説明が役立つであろう。「恩給軍隊」なる語は、1919年に米国在郷軍人会の設立に至った第一次世界大戦復員軍人の恩給支給の要求に由来する。この軍人恩給請求の政治運動は、1924年に米国政府が世界大戦調整補償法[World War Adjusted Compensation Act]を承認したことで部分的に成功を取めた。一日当たりで海外兵役に1.25ドル、国内兵役に1.00ドルの恩給支給が1925年に認可された。1932年の春から夏にかけては、世界恐慌がおよそ43,000人の兵士たちに「恩給派遣軍」[Bonus Expeditionary Force]を宣言させる動きへと事態を進展させた。ボヘミアン・グローブの要員であったハーバート・フーヴァー大統領は、こうした復員軍人らを排除するよう陸軍に命じた。死の血盟団員ダグラス・マッカーサー將軍がこの任務を指揮した。当時マッカーサーの首都警察連絡官であったドワイト・D・アイゼンハワー少佐は、これら復員軍人とその家族らを銃剣と催涙ガスで攻撃する手配をした。復員軍人家族らがアナコスティア川を渡り退却した時にフーヴァーはマッカーサーに攻撃停止を命じたが、バーナード・バルークに忠実なマッカーサーとアイゼンハワーは攻撃を続けたので、結局100人以上が重傷を負わされ子供2人が殺された。しかし、この暴虐事件は、アイゼンハワーが書きマッカーサーが承認しに報告書によって隠蔽されてしまったのである。

<sup>33</sup> ジェイムズ・アンソニー・ウィルズによって描かれたドワイト・アイゼンハワーの1967年公式ホワイトハウス肖像画に基づく挿絵(平和教育協会2013年)より転載。

<sup>34</sup> メリーランド州カレッジ・パークにある国立公文書館II [訳注=首都ワシントンにある本館に対して「新館」とも呼ばれる]、記録グループ77、マンハッタン・エンジニア地区。捕らえられて英国ファーム・ホールに抑留されたナチスの原子物理学者C・F・フォン・ワイゼッカー[C.F.von Weizsäcker]は、「我々がそれ[広島で爆発させたのと同じようなウラニウム原子爆弾の製造を完成すること]をしなかった理由は、全ての物理学者が主義としてそうしなかったからだとは私は信じている。もし我々が本当にドイツが戦争に勝つことを望んでいたのなら、きっと原爆を完成させていだろう!!・・・間違いなく我々は完成に非常に近い状態であったが、戦争が続いている間は完成させることはありえないと我々皆が確信していたのが事実だ」と打ち明けている。以上発言記録の開示謄本は<http://www.atomicarchive.com/Docs/Hiroshima/Farmhall.shtml>を見よ。

<sup>35</sup> ハワード・デイヴィス制作のBBCドキュメンタリー『コペンハーゲン降下物』[Howard Davies, *Copenhagen Fall Out*, London, UK: BBC, 2005]。ニールズ・ヘンリック・デイヴィッド・ボーア[Niels Henrik David Bohr] (1885年10月7日～1962年11月18日)は、原子構造と量子力学の解明に基礎的貢献をしたデンマークの物理学者である。

ナチスの原爆が完成間近いとのハイゼンベルクの言明、即ち長年歴史の中に埋もれてしまうであろう事実があったにも拘らず、1934年には血盟団はアドルフ・ヒットラーに対する影響力を失っていた。その結果、血盟団は原爆開発を米国に移し直すことになり、結局ニールズ・ボーアが彼等のマンハッタン計画に加わるようになるのである。<sup>37</sup>

バーナード・バルークは、血盟団に仕える工作要員らが原爆投下目標を決定する地位に就くのを確実にするために背後で動いた。又、彼は、広島と長崎が通常爆撃から免れるように手配した。そこで、死の血盟団に仕えるフリーメイソンのハップ・アーノルド元帥は、1945年8月6日以前は予定された科学実験のために広島と長崎が戦災を受けないようにしておくことを他の将軍たちに指令した。<sup>38</sup>

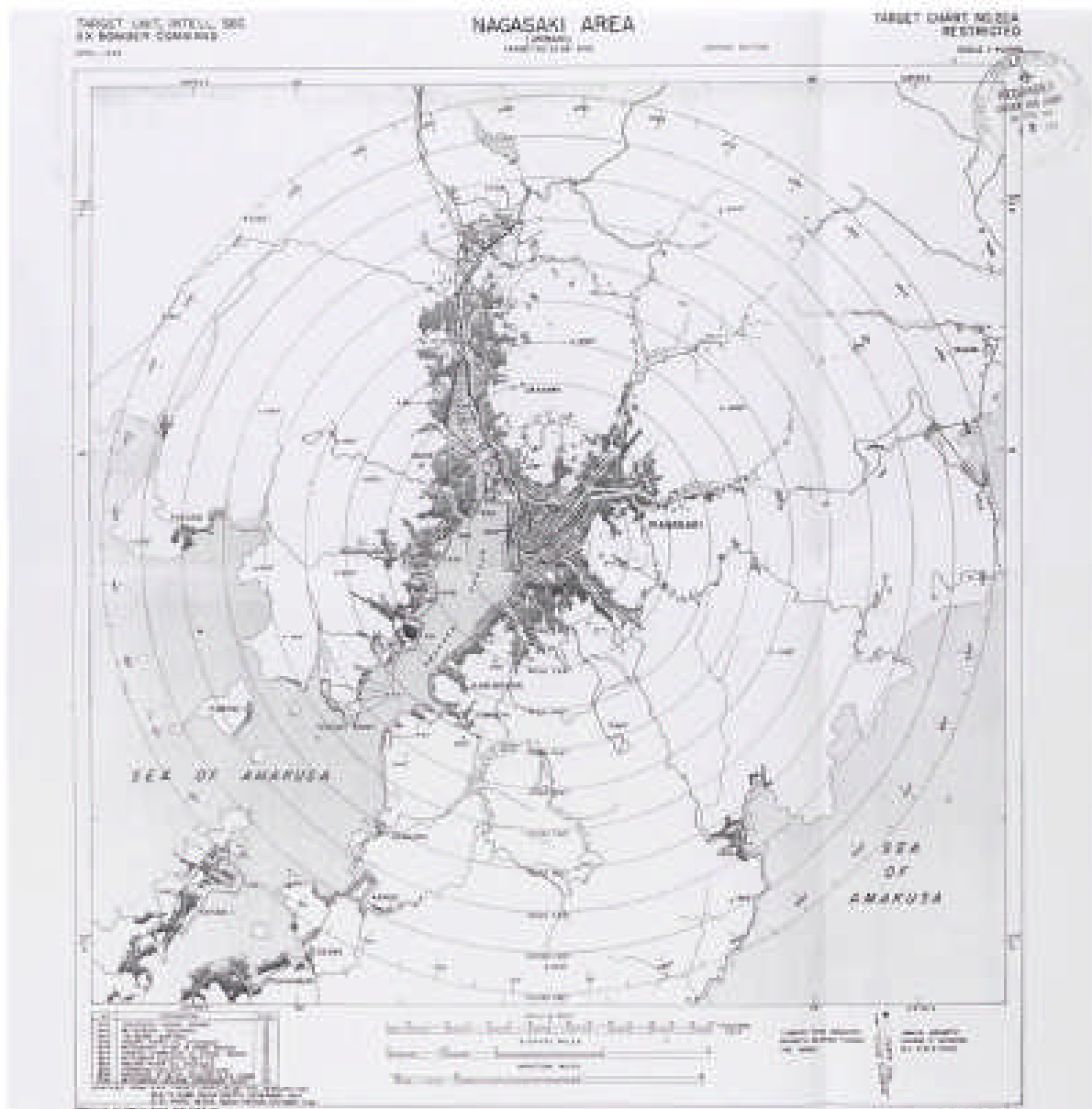
死の血盟団は、原爆計画の隅々にまで深く関与しながら、単に日本の敗北だけを求めていたのではなかったのである。

---

<sup>36</sup> ロバート・ユンク著『千の太陽より輝けり—原子科学者たちの個人史』[Robert Jungk, *Brighter than a Thousand Suns: Personal History of the Atomic Scientists*, New York; Harcourt, Inc., 1956]。1960年代に、死の血盟団は米英の諜報機関を使って1941年にハイゼンベルクと交わした会話についてボーアを混乱させようとした。血盟団は、ドイツの原爆計画が1941年にハイゼンベルクが伝えたほど深刻ではなかったとボーアに信じ込ませようとしたのである。

<sup>37</sup> 原爆関係資料館[Atomic Archive]ホームページ [www.atomicarchive.com/Bios/Bohr.shtml](http://www.atomicarchive.com/Bios/Bohr.shtml) を参照。ドイツにおける1934年の状況については、前掲書「注意深きキリスト教徒」著作シリーズ第Ⅲ巻『9/11 事件犯人らのオカルト宗教』45-47 頁を見よ。

<sup>38</sup> マイケル・シェリー著『アメリカ空軍力の台頭』[Michael Sherry, *The Rise of American Air Power*, New Haven, Connecticut: Yale University Press, 1987]、255 頁及びトム・ヴァンダビルト著『生き残り都市—原爆アメリカの廃墟の中の冒険』[Tom Vanderbilt, *Survival City: Adventures Among The Ruins Of Atomic America*, New York: Princeton Architectural Press, 2002]、73 頁、300 頁、410 頁を参照。なお関連資料では、1945年6月、ハップ・アーノルドがカーティス・ルメイ大将に何時戦争が終わるかと訊ねたのに対して、ルメイは、爆撃する標的がなくなってしまう頃の9月か10月になると答えている。

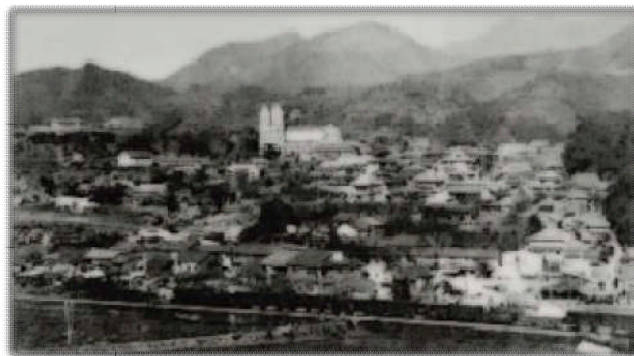


39

<sup>39</sup> 国立公文書館の承諾を得て転載。爆撃目標地図 90-36-542(第 20 爆撃隊司令部情報部標的班 1945 年 4 月作成)を示す長崎標的地図原版の写真。この標的地図は、予定された原爆「デブ男」の標的が実際の爆心地よりも南に 2 マイル離れた地点であったことを明確に示している。詳細は <http://www.archives.gov/research/recover/missing-documents-images.html> 及びレスリー・グローヴス著『今や語りえること—マンハッタン計画の物語[General Leslie M. Groves, *Now It Can Be Told: The Story of the Manhattan Project*, New York: Harper, 1962], 343 頁を見よ。グローヴスは、公式の目標地点が実際の爆心地より南であったことを確認しており、「目標地点が長崎港の東になっていた」と書いている。サンフランシスコ・ゲイト紙(2009 年 7 月 5 日付)ラリー・マガサク[Larry Margasak]の記事「多くの公文書文件が紛失ないし盗まれている」[“Many U.S. archives items lost or stolen,” *SFGate*, 5 July 2009]又は <http://www.sfgate.com/news/article/Many-U-S-archives-items-lost-or-stolen-3224827.php#photo-2367418> を見よ。

## 不屈の都市

「運命は、長崎を究極の目標に選んだ」<sup>40</sup> ウィリアム・ローレンス



41

長崎の町が 1945 年には日本の基督教の中心地であったと云う事実は、一般的に米国や西洋世界の殆どの人々に知られていなかった。

歴史家ウィリアム・クレイグは、「長崎は日本のカトリック教の中心であったし、御宿りの聖母マリアは極東最大のローマ・カトリックの大聖堂であった」と書いている。その地元教区民によって建てられた大聖堂は、基本的に、1549 年に当地を訪れた聖フランシス・ザビエルの教えによって改宗した人達が始めた信仰の自由を求める証しであった。<sup>42</sup> 長崎に対する原爆投下の際にグランド・ゼロとして選ばれたのは、まさにこの大聖堂であった。<sup>43</sup>

米国海軍元帥ウィリアム・D・リーヒーによれば「対日戦争で何の実質的な利益にもならない」のに、何故一都市の基督教大聖堂が原爆投下の目標に選ばれたのかは、初めは理解しがたいかも知れない。しかし、死の血盟団の真の意図が明かになると、その疑問も直ちに解けるのである。<sup>44</sup>

<sup>40</sup> ウィリアム・L・ローレンス[William L. Laurence]著『目撃者の報告—長崎への原爆投下飛行』["Eye Witness Account: Atomic Bomb Mission Over Nagasaki," *War Department Bureau of Public Relations*, 9 September 1945]及び <http://www.atomicarchive.com/Docs/Hiroshima/Nagasaki.shtml>.

<sup>41</sup> 平和教育協会が 2013 年に長崎原爆資料館所蔵の写真から作成した挿絵で、原爆投下前の長崎爆心地周辺を示す。原写真の撮影者と撮影時期は不明。

<sup>42</sup> クレイグ、前掲書、89 頁。サミエル・リー著『日本再発見、基督教再導入』[Samuel Lee, *Rediscovering Japan, Reintroducing Christendom*, Plymouth, United Kingdom: Hamilton Books, 2010]。日本の基督教は 1549 年にイエズス会伝道師フランシス・ザビエルによって始められたと伝えられているが、リーの研究は多分にザビエル以前に基督教が日本へ伝来していたことを示している。

<sup>43</sup> エドウィン・O・ライシャワー著『日本とアメリカの間に生きた我が人生』[訳注=日本での翻訳出版書名は『ライシャワーの昭和史』(講談社、2009 年)] [Edwin O. Reischauer *My Life Between Japan and America*, New York: Harper & Row, 1986], 61 頁。この自叙伝の中で、元駐日アメリカ大使エドウィン・ライシャワーは、当のカトリック大聖堂が爆心地であったことを認めており、第二次世界大戦開始前に長崎へ調査に行ったことに触れて、「我々は長崎で調査を始めたが、そこで 8 年後に原爆第 2 弾の爆心地にされたカトリック大聖堂を見たのであり、当時我々はそこから調査を進めて行ったのである」と書いている。

<sup>44</sup> ウィリアム・D・リーヒー[William D. Leahy]著『私はそこにいた—ルーズベルト・トルーマン両大統領に仕えた軍参謀長の個人的逸話』[*I was there: Personal Story of the Chief of Staff to Presidents Roosevelt and Truman, Based*

ドワイト・アイゼンハワー将軍は、こう書き残している—「日本は、まさにその時に最小限の面目を保って何とか降伏できればと求めており、あのような酷いやり方で彼等を打ちのめす必要はなかったのだ」と。<sup>45</sup>

ヘンリー・L・スティムソン国務長官は、1947年出版の回顧録『戦争と平和における積極的貢献について』の中で、日本政府が早くも1945年の春には「最終的に同意したのと実質的に同じ[降伏の]諸条件を受け入れる」態勢にあったと認めている。<sup>46</sup>「アメリカ側がその対応を遅滞させることによって戦争を長引かせたことは、歴史を見れば分かるかも知れない」と、スティムソンは書いている。<sup>47</sup>

---

on His Notes and Diaries Made at the Time, McGraw-Hill Book Company, 1950], 441 頁。海軍元帥ウィリアム・D・リーヒー(1875年5月6日～1959年7月20日)は統合参謀本部議長であった[訳注＝リーヒーは、大統領の個人的軍事顧問として事実上の統合参謀本部議長(1942-49年)を務めた]。『米国戦略爆撃調査—戦争終結への日本のあがき』[*United States Strategic Bombing Survey: Japan's Struggle to End the War*, Washington, D.C.: Government Printing Office, 1946]によれば、同調査は、戦後日本側指導者数百人から直接聞き取り調査をした結果として、原爆投下がなくても又アメリカ軍の日本本土進攻やソ連軍の対日侵攻がなくても1945年には日本が降伏していたであろうとの結論を得ていた。

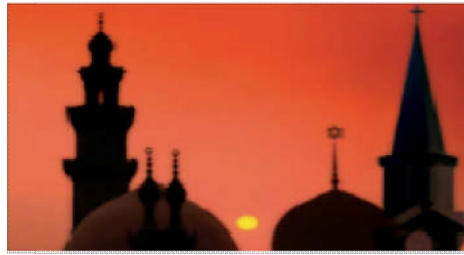
<sup>45</sup> デイヴィド・クリーガー著「広島から人類へ」、『核時代平和の基礎』[David Krieger, "From Hiroshima to Humanity," *Nuclear Age Peace Foundation*, August 2005]([www.wagingpeace.org/articles/2005/08/00\\_krieger\\_from-hiroshima-to-humanity.htm](http://www.wagingpeace.org/articles/2005/08/00_krieger_from-hiroshima-to-humanity.htm))。ドワイト・アイゼンハワー陸軍元帥の見解では、大量虐殺は戦争を終わらせるのに不必要であったので原子爆弾の使用は罪悪行為であった。加えて、トルーマン大統領は、ヨセフ・スターリンが1945年8月15日に対日戦争に参入することを約束し、「それで日本野郎をやってしまう」と云っていたと日記に記している。戦争を迅速に終わらせるためには原爆を必要としなかったと云うトルーマンの証言はあまり知られていないし、原爆が百万以上のアメリカ兵士が戦死するのを防いだとする主張とも矛盾する。上記トルーマン日記の引用箇所は、マイケル・J・ホーガン編『歴史と追憶における広島』[Michael J. Hogan, ed., *Hiroshima in History and Memory*. Cambridge, U.K.: The Press Syndicate of the University of Cambridge, 1999], 19 頁。なお、ガル・アルペロヴィッツ著『原子爆弾使用の決定』[Gar Alperovitz, *The Decision to Use the Atomic Bomb*, New York: Vintage Books, 1996], 7 頁では、米国原子力規制委員会の歴史主任 J・サミュエル・ウォーカー [J. Samuel Walker] は、「原爆が 150 万のアメリカ兵士の戦死を防い」と云う陳腐な主張は実証できない」と述べている。

<sup>46</sup> ヘンリー・L・スティムソン著『平和と戦争における積極的貢献』[Henry L. Stimson, *On Active Service in Peace and War*, New York: Harper & Brothers, 1947], 628 頁。スティムソン(1867年9月21日～1950年10月20日)は、「日本の指導者の中には如何なる融和的な提案も弱さの表われとして飛びつくのがあるであろう」との理由で国務次官ジョーゼフ・クラーク・グルー[Joseph Clark Grew]の対日工作に反対したと回顧録で説明している。ジョーゼフ・クラーク・グルー(1880年5月27日～1965年5月25日)は、駐日大使(1932年6月14日～1941年12月8日)を務めた経歴もあり、トルーマン政権の対日工作面での最高幹部であった。他方スティムソンは、一見、死の血盟団の日本からキリスト教を一掃する計画を知らずに日本指導部の少数派から弱さの表われと取られる恐れよりも何千人もの子供たちを焼き殺し戦争を長引かせることを望んだようであるが、原爆の隠された狙いを理解するとスティムソンの行為がはっきり分かるのである。例えば、太平洋地域で最も犠牲の多い戦闘であった沖縄戦は、日本を降服させるのに不必要であったが、人々を欺き2発の原爆が多くの人命を救ったと信じこませるのには必要であった。太平洋戦争で最大の陸海空合同の侵攻作戦がなされた沖縄戦は、結局10万以上の人々(アメリカ人、イギリス人、カナダ人、オーストラリア人、そして日本人)を殺戮して1945年6月22日に終了した。1945年以来、死の血盟団の工作員らと無知蒙昧の輩は、原爆による破壊がなければ日本本土の侵攻作戦が必要であったとする偽りの想定を固めるために沖縄戦を引き合いにしてきた。

<sup>47</sup> 同上書、629 頁。ジョーゼフ・クラーク・グルーは、日米開戦後9ヶ月間抑留された後1942年8月に勅命で解放され米国に帰還した。原爆が投下される前に戦争を終結させて日米両国の人命を救おうとしたグルーの努力は、何故スティムソンが「1945年5月にグルーと彼の側近らが熱心に主張していたように、天皇を保持するとのアメリカの意志を明確かつ早期に表明しておれば戦争のより早い終結をもたらしたであろうことは最終的な降伏として可能である」と述べていたかを説明する助けになる。



死の血盟団にとっては、原子爆弾は当時昭和天皇が神として認められなくなった空所をキリスト教が支配するのを防ぐために必要であった。キリストの時代以降、「蛇の教団」や「新世界秩序」の名称でも知られる秘密結社「死の血盟団」の主要目的の一つは、主としてキリスト教・ユダヤ教・イスラム教など世界の主要な宗教をつぶすことであった。



48

1859年にトーマス・ブレイク・グラバーは、死の血盟団のために日本のキリスト教を侵害し有力大名に兵器を売りつける目的でロスチャイルド家により日本へ送りこまれた。彼は、長崎にフリーメイソン支部集会所を設置し、三菱の会社創設に重要な役割を果たした。その三菱は、第二次世界大戦中の伝説的な戦闘機ゼロ戦を含む多くの兵器を製造することになる。<sup>49</sup>

歴史上では、時には、死の血盟団がキリスト教の広がりを阻止するのに成功している。しかし、長崎の場合、更に驚くべきは日本全国の場合、キリスト教は伝来初期の残酷な迫害にも拘わらず19世紀末までに幾つかの教派をもって繁栄していたのである。日本では、1873年までにキリスト教

<sup>48</sup> 平和教育協会 2013年挿絵集より転載。

<sup>49</sup> トマス・ブレイク・グラバー(1838年6月6日～911年12月16日)は、スコットランドのアバディーンのフリーメイソンであった。彼は、日本に内戦を起させるためにロスチャイルド家によって派遣された死の商人「スコットランドの侍」として知られている。グラバーは1859年に貿易会社ジャーディン・マセソン社員として長崎に到着した。彼が長崎で設立したフリーメイソン支部集会所は、東京の支部集会所に先行し、超立方体の表象と元々無害な家紋から666の意匠に変形された屋根紋章で粉飾された泉に囲まれていた。



グラバーのオカルト「死の血盟団」の表象は長崎の至る所に散乱しており、その五芒星形シンボルの例は長崎市の旗や下水溝格子の写真などに見られる。



又、グラバーは、現在キリンビール株式会社として知られるジャパン・ブルワリー会社の創業者でもあった。ロスチャイルド家は、グラバーを使って三菱の創業者岩崎弥太郎に主要な援助をした。グラバー庭園長崎案内図によれば、岩崎弥太郎の死後は、息子の岩崎弥之助がグラバーと事業を続けた。三菱創設における死の血盟団の役割は、何故原爆「デブ男」が三菱の工場を標的にしなかったかを説明する助けになろう。アメリカ兵士捕虜から強制徴用の朝鮮人に至るまで奴隸的使役を頻用していた三菱は、日本軍の伝説的な「ゼロ戦」航空機など一連の兵器を製造していた。フリーメイソン会員は、1926年に長崎から放逐され1930年代までには日本からも追放された。グラバーの息子倉場富三郎は、1945年8月26日、連合軍が長崎に進駐するとの知らせを受けるや首つり自殺したと云われている。その時、彼は74歳で、その死をもって、日本の江戸時代から明治時代への移行に影響を及ぼしたグラバー家の役割は終了したのである。

は非常に普及していて、禁教の形跡は全て取り除かれ、西洋新暦が採用されていた。<sup>50</sup> 日本は宗教の自由地として知られるようになり、<sup>51</sup> その頃には、日本人は新しい天皇の即位からだけでなくキリスト生誕からも時を数えるようになっていた。

死の血盟団は、長崎地域のキリスト教徒の増加を見て長崎を重大目標にした。原爆が開発される時までは、市内に5万人程のキリスト教徒が住む長崎は彼等の世界制覇計画にとって紛れもない脅威となるであろうから全滅させるべきだと判断したのである。<sup>52</sup>

原爆投下の反キリスト教目的を隠蔽するために、血盟団の工作要員らは投下後の世論工作活動を大々的に組織した。その一例が、カトリック神父とプロテスタント牧師に原爆投下任務を祝福させるよう手配したことである。<sup>53</sup>



54

---

<sup>50</sup> ジョーン・ドージル著『日本の隠れキリシタンを探して—禁圧、潜伏、生き残りの物語』[John Dougill, *In Search of Japan's Hidden Christians: A Story of Suppression, Secrecy and Survival*, Tokyo, Japan: Tuttle Publishing, 2012]、190 頁。

<sup>51</sup> オティス・ケアリー著『日本におけるキリスト教の歴史—ローマ・カトリック、ギリシャ正教、プロテスタント伝道』[Otis Cary, *A History of Christianity in Japan: Roman Catholic, Greek Orthodox, and Protestant Missions*, New York: Fleming H. Revell Company, 1909]、315 頁。ケアリーは、「日本が信仰の自由を擁護しているのは本当である。日本では、人々は、仏教徒であっても、キリスト教徒であっても、ユダヤ教徒であってもよく、そのことで受難することはない。これは、この国の憲法に定められた原則であり、この原則に従って実践されているのである」と書いている。

<sup>52</sup> 『カトリック百科全書』[*The Catholic Encyclopedia*]によれば、長崎は、1569年にキリスト教伝道師らが到着する以前は小さな村であった。人口増加を含む長崎の発展史については <http://www.newadvent.org/cathen/10667c.htm> を参照。長崎のカトリック教徒人口は、1885年で23,000人であったが、1910年までには47,104人に増加していた。長崎の司教区は、九州と周辺6島—天草・五島・壱岐・対馬・大島・琉球諸島を含んでいた。オティス・ケアリー、前掲書、117・153・166・194・281・299・341・353・371 頁を参照。同書371・372 頁では1908年の日本におけるキリスト教徒人口が示されており、全宗派で50,000人近い。なお、ケアリーの資料源はパリ一発行の『諸外国での布教団体 1909 年次報告[1909 Annual Report of the Société des Missions-Étrangères published in Paris]である。

<sup>53</sup> 原爆投下の成功を祈った従軍牧師はジョージ・ザベルカ神父であった。戦後になって、ザベルカ神父は、原爆を祝福して大変な過ちを犯したことに気づき、以後は非暴力を教え軍国主義に反対した。又、ルーテル教会牧師ウィリアム・ダウニーも、原爆を祝福したことを後悔し余生は非暴力を教えて過した。これら二人の牧師は、原爆投下の目的のみに編成された1,500人からなる陸軍の第509混成空軍部隊に配属されていた。

<sup>54</sup> 平和教育協会 2013 年挿絵集、第二次世界大戦時写真より転載。

<sup>55</sup> チャールズ・W・スウィーニー、ジェイムズ・A・アントヌッチ、マリオン・K・アントヌッチ著『戦争の終焉—アメリカ最後の原爆攻撃の目撃証言』[Charles W. Sweeney, James A. Antonucci and Marion K. Antonucci, *War's End: An Eyewitness Account of America's Last Atomic Mission*, New York: Avon Books, 1997]、186 頁。

原爆投下機の操縦士チャールズ・スウィーニーは、ルーテル派牧師のビル・ダウニー大尉が「私は、人を殺すためと殺されるために飛び立つ男達とその飛行機を祝福します。私は、彼等の行動を私の祝福によって許します」と述べたと書き記している。<sup>55</sup>

死の血盟団にとって、これは、様々な理由づけになる重要なことであった。<sup>56</sup> 彼等の信条では、人間の犠牲は力を生み出すために必要とされるが、原爆でもたらされる甚大な人的犠牲は注意深く隠蔽されなければならなかった。従って、宗教指導者たちが原爆使用に公然と反対しないように納得させる必要があったのである。あからさまな状況での人的犠牲や他の邪悪行為を隠蔽することは、「死の血盟団」教の重要な活動部分でもある。



57

血盟団による暴力行為を究明しようとする「陰謀論者」や真実を追求する人達の殆どが理解できないことは、まさに血盟団にとってその信仰が如何に重大であるかである。

---

<sup>56</sup> ウィリアム・L・ローレンス著『ゼロ地点の夜明け—原爆物語』[William L. Laurence, *Dawn Over Zero: The Story of the Atomic Bomb*, New York: Knopf, 1946], 229 頁。当時、長崎爆撃命令では、18 時 30 分にカトリック礼拝と 23 時にプロテスタント礼拝を指定しており、ローレンスは、ダウニー牧師による次のような感動的な祈禱をもって出撃前の作戦要領訓示を終えたと記している。—「全能なる神、限りなく慈悲深い父よ、どうか今夜飛び立つ者達にお情けを賜りますよう。あなたの御空の暗がりの中へ健気にも進み行かんとする我等の間を見守りご加護下さるよう。あなたの御翼の上に彼等をお支え下さるよう。彼等を心身ともに無事で我等のもとに帰還させて下さるよう。又これから幾時かの間、どうか我等にあらゆる勇気と力をお与え下さり、彼等の苦勞に相応の報いをお与え下さるよう。我等が父よ、とりわけ、あなたの御世に平和をもたらせ給え。あなたに委ねて、我等が今後も永遠にあなたの御前であることをわきまえつつ、我等を前進させて下さるよう、お祈り申し上げます。アーメン！」

<sup>57</sup> 平和教育協会 2013 年挿絵集より転載。フクロウは、サタンのオカルト表象である。死の血盟団員らは、サタンを、賢明で、暗闇で静かに獲物を取り、明るい所では隠れているフクロウに準えて観ている。このフクロウの象徴は、死の血盟団にとって価値ある多くの物事に、明るい所で密かに見つけられるように示している。既述のボヘミアン・グローヴ、1 ドル札、米国会議事堂などで、その例が見られるのである。



## 全視眼カルト

「これは、私が自分で答えを出すべき質問だ」<sup>58</sup>

死の血盟団、全視眼カルト成員ヘンリー・ルイス・スティムソン



59

善が悪の反対で闇が光の反対であるように、血盟団の宗教も、アブラハムの信仰上は邪悪な鏡として存在し、その中心的信条を転倒させて真実とは反対の働きをしている。

キリスト教徒が創造の神の子イエスを彼等の主であり救世主であるとして崇拝するように、死の血盟団ないし蛇の教団は、闇の神を崇拝し破壊の神の所産としての反キリスト、ダジャール、を崇拝する。秘密結社への加入に際して、入会儀式を終えた会員らは、彼等の魂を破壊の神に捧げることを誓約し、その命令に従うことを誓うのである。

多くの秘密結社が主張しているように、彼等の慣習と儀式はバビロンと古代エジプトの慣習や儀式に則っているため、彼等のアイコンやシンボルはしばしば古代エジプトの偶像や象徴を反映しており、その最も顕著なものが「ホルスの目眼」や「全視眼」である。<sup>60</sup>



61

<sup>58</sup> グローヴス、前掲書、273 頁。この引用文は、グローヴス空軍少将が原爆投下の標的都市について空軍標的委員会の提案を述べた際のスティムソンの発言である。グローヴス少将は、このスティムソンの応答について、「私が原爆投下の標的都市リストを彼に渡した時に、彼は直ぐに京都案に反対し承認しないと云った」と書いている。なお、長崎は、グローヴスが提出した標的リストには入っていなかった。スティムソンは、1884 年から 1888 年までイエール大学に在学した死の血盟団「骸骨野郎」[訳注＝秘密結社スカル・アンド・ボーンズ 成員の別称]の一員である。

<sup>59</sup> 国立公文書館所蔵のヘンリー・スティムソンの写真(1942 年撮影)より作成の平和教育協会 2013 年挿絵集より転載。

<sup>60</sup> 全視眼シンボルは、連結した悪を示す主要なシンボルで、明知ある優越者たち或いは「超人たち」が世界を支配することを表わす。このシンボルは、魔王ルシファーの目がプラトンの 3 階級の人々(即ち統治者、護衛者、職人の 3 階級で、これら全ての者がルシファーに仕える奴隷である)を支配していると云う意味である。ルシファーは、シバ神のような死者の神と結びつけて考えられ、他にもルシファーらしき名称としてアマール [Amaru]、アポロ [Apollo]、アヌニト [Anunit]、アヌビス [Anubis]、バール [Baal]、バッカス [Bacchus]、デスティニー [Destiny]、ディオニシアス [Dionysius]、イシス [Isis]、ジョーヴ [Jove]、ジュピター [Jupiter]、ククルカン [Kukulcan]、モラク [Molach]、オシリス [Osiris]、パン [Pan]、ポイボス [Phoebus]、ケツアルコアトル [Quetzalcoat]、ソーラー [Solar]、サタン [Satan]、サターン [Saturn]、シリウス [Sirius] など色々ある。

<sup>61</sup> 平和教育協会 2013 年挿絵集より転載。米ドル紙幣の全視眼図柄上の「神われらの企てを嘉し給えり」を意味するの文言「アニュイト・セプティス」[Annuity Coeptis]には二重の意味がある。死の血盟団の信条体系では語句

最古最大の「死の血盟団」秘密結社の公然団体は、フリーメイソン団である。<sup>62</sup>フリーメイソン団には長い歴史があり、何世紀もの認証済みの公文書が証拠として存在する。<sup>63</sup>米国でのフリーメイソン団の影響は、第110回米国議会下院決議第33号によっても実証されている。<sup>64</sup>この決議は、当時「各州に何千人ものフリーメイソン団員」がいることを認め、米国憲法の制定者と署名者の大半がフリーメイソン団員であったことを記している。彼等が悪の諸行為に加担していたか否かは別として、合衆国大統領の殆どが死の血盟団の何らかの組織の成員であったことが分かるのである。<sup>65</sup>



66

---

の綴りより発音が重要となる。”Annuit”の中で”n”の字を置き換えて”Anunit”とすると、アヌニト即ちルシファーが「われらの事業を嘉し給えり」との意味になる。この翻訳は、ローマ人の先祖になったトロイ人アイネアースについて紀元前29-19年間にラテン語の叙事詩を書いたローマの詩人ヴァージルによって確認されている。この叙事詩アエネイスでは、第9巻625行目で”Iuppiter omnipotens, audacibus adnue coeptis”と述べているが、このアスカニオスの祈願を翻訳すると、「全能なるジュピターは大胆な事業を嘉し給えり」となる。アエネイス全体にわたって、神々は絶えず人々に世界を変えるべく影響を及ぼしているとある。

<sup>62</sup> ノヒア・O・A・ペックは、著作『日本におけるフリーメイソン団—最初の百年 1866—1966年』[Nohea O. A. Peck, *Freemasonry in Japan, The First One Hundred Years*, Tokyo, Japan: The Voyagers' Press, 1969]の表紙裏面でフリーメイソン団が日本で1866年に公式に始まったと記述している。

<sup>63</sup> 同上98頁。米国海軍マシュー・C・ペリー提督[U.S. Naval Commodore Matthew C. Perry]は1853年にフリーメイソン団を日本へもちこむのを助けた、とフリーメイソン員のビル・ペイン[Bill Paine]によって称賛されている。ペインは、ニューヨーク市の第8オランダ支部員で、1994年4月27日に『フリーメイソン団と近代日本の歴史』[*Freemasonry and Modern Japanese History*]の著者ティム・ワンゲリン[Tim Wangelin]との会談でこの情報を提供している。

<sup>64</sup> 第110回米国議会下院決議第33号(2007年1月5日付)は、冒頭で「本邦各州に何千人ものフリーメイソン団員を確認し且つ本邦の歴史を通して彼等が本邦に多くの貢献をなしたことにより彼等に大いに敬意を表する」と記している。なお、当決議文は <https://www.govtrack.us/congress/bills/110/hres33/text> に掲載されている。

<sup>65</sup> フリーメイソン団員でアメリカ合衆国大統領になった者は、ペンシルバニア・フリーメイソン図書館・博物館に永久展示されている。この展示内容については <http://www.pagrandlodge.org/mlam/presidents/index.html> を参照せよ。フリーメイソン団員として公式に認められている大統領には、ジョージ・ワシントン、ジェームズ・モンロー、アンドルー・ジャクソン、ジェームズ・ポーク、ジェームズ・ブキャナン、アンドルー・ジョンソン、ジェームズ・ガーフィールド、ウィリアム・マッキンレー、セオドア・ルーズベルト、ウィリアム・ハワード・タフト、ウォレン・ハーディング、フランクリン・ルーズベルト、ハリー・トルーマン、リンドン・ジョンソン、ジェラルド・フォードが含まれている。フリーメイソン団と密接な関係にあった大統領の名簿となると更に長くなる。例えば、ロナルド・レーガンは、1988年2月11日に首都ワシントンの本部によって名誉スコット儀式団員[訳注=フリーメイソン団33級が授与される]となった。トマス・ジェファーソン、ジェームズ・マディソン、ザカリー・テイラー、フランクリン・ピアース、ウィリアム・クリントンなどは、幾つかのフリーメイソン団員名簿に記載されている。例えば、聖書の1951年フリーメイソン版49頁によれば、トマス・ジェファーソンはフリーメイソン団員であった。しかるに、フリーメイソン団役員らは、公的には、彼等の団員資格について不明であると主張するのが常である。

<sup>66</sup> このジョージ・ワシントン画像は、ジョージ・ワシントン・フリーメイソン国立記念協会の提供による。但し、この画像は余分な部分を裁ち落としてあり、完全画像は <http://www.gwmemorial.org/tour.php> で参照せよ。なお、ジョージ・ワシントン・フリーメイソン記念館南壁面には、1793年フリーメイソンによる合衆国議会建設の定礎式典を描いた壁画がある。

死の血盟団の信条の主要な側面は、信奉者らを与えられた秘密の知識を保持することで彼等自身を神に変身できると思うことである。これを根拠として、彼等は、地上の神として、何事においても望むことを達成するために莫大な富を得たり他者に甚大な犠牲を強いたり集団虐殺を犯すなど自分勝手な行動の規範を作り上げることができるのである。

1500年代の半ばまでには、血盟団の要員らが日本に侵入しており、その後間もなく長崎は古代ローマのようにキリスト教弾圧の地になってしまうのである。

---

## キリスト教徒の弾圧

長崎は、5世紀以上もの間日本のキリスト教の中心であった。長崎を主要な原爆投下目標とするために、死の血盟団は、彼等の最大の秘密結社フリーメイソン団の要員を使用した。<sup>67</sup>

デイヴィッド・J・ディオニシ

1549年に、イエズス会宣教師の聖フランシス・ザビエルは、日本へのキリスト教布教の希望を抱いてスペインから鹿児島に到着した。



68

9月29日、ザビエルは、鹿児島の大名島津貴久を訪ねて日本で最初のキリスト教伝道所を建てる許可を求めた。この大名は、ヨーロッパとの通商関係を望んでこれに同意した。

ザビエルは551年に日本を去り中国へ旅立ったが、後に残った彼の信奉者らは更なる数の地元大名をキリスト教に改宗させた。

これら地元領主の間で最も有名なのは大村純忠で、彼は「キリシタン」教への改宗によって付随取引としてポルトガル船から交易利益の一部を受け取り大きな富を得たが、同時に彼自身はキリスト教に心から魅了されていた。事実、大村の「南蛮人の宗教」に対する崇敬の念は非常に厚く、家臣の武士や職人・領民ら全員に即座改宗を命じたほどであった。こうした大村の例に続いて、もう一人の有名な武士高山右近も自分が「キリストの戦士」とであると宣言した。<sup>69</sup>

1571年に長崎が大村の対外常設港として開港されると、長崎は多くのキリスト教徒が日本にやってくる入り口となった。10年以上もの間、大名の庇護下でこの新しい宗教は広く普及し、1580年までには、長崎は「小ローマ」として知られるほどになり、大聖堂の周辺地域は「日本のバチカン」と呼ばれるほどであった。<sup>70</sup>

---

<sup>67</sup> デイヴィッド・J・ディオニシ、前掲書、第II巻。

<sup>68</sup> 平和教育協会 2013年挿絵集より転載。この画像は、聖フランシス・ザビエルが実際にスペインからの渡航に使った船を示すものではない。

<sup>69</sup> ジュスト高山右近(1552年～1615年2月4日)又は重友彦五郎は、ドム・ジュスト高山としても知られている。彼は、徳川家康によって国外追放となり、1614年8月に長崎を去りフィリピンのマニラに向った。彼は、フィリピンで死去し埋葬された最初の大名で、その銅像はマニラのディアオ広場に立っており、現在はローマ教会で聖人位が考慮されている。

<sup>70</sup> ドーゼル、前掲書、52頁、177頁。「かくして、ザビエルが去って丁度30年後には、長崎の布教本部はポルトガル人の安息地としてゴア・マラッカ・マカオに匹敵する港を備えた「日本のヴァチカン」となっていた」と、ドーゼルは書いている。

なっていたことである。<sup>71</sup>

こうした成功にも拘わらず、豊臣秀吉の天下統一をめざす九州遠征に続いて起ったことは、秀吉によるキリスト教全体に対する事実上の禁止令であった。



72

当時日本の政界におけるイエズス会の横柄とも見られる活発な言動と南日本での多大なキリスト教の影響を懸念した秀吉は、バテレン追放令を発して宣教師全員の追放を命じ、長崎の町を直接支配下に置いた。

1596年にスペインのサン・フェリペ号が四国の沖合で難破した際に、秀吉は、その航海士からスペインのフランシスコ修道会が日本侵略の先鋒であるとを伝えられた。

そこで、秀吉は、その年の2月に長崎で26人のカトリック信者のはりつけを命じた。これらの者たちは、後に26人の殉教者として知られることになる。<sup>73</sup>

やがて日本の戦国時代が終り、明確な勝者として武将徳川家康が台頭してくると、日本におけるキリスト教の終りが告げられた。

キリスト教禁止令が出されて数年のうちに、キリスト教徒達は、ユダヤ人がヒットラーの軍隊によって一斉に捕えられ鉄道で強制収容所に連行されたように、捕えられて大八車に乗せられ長崎に連行されて、何千人もが拷問され殺されたのである。

その頃、多分に死の血盟団要員らの影響を受けた徳川家康や他の大名らは、通俗的にキリスト教を「南蛮人の宗教」とみなし、この「蛮人宗教」の献身的な隠れ信者が発見されると邪教の罪で火あぶり、はりつけ、水攻めなどの刑に処するのが常であった。

---

<sup>71</sup> 同上書、134頁。1597年のヨーロッパにおける代表的な大印刷所は300冊から500冊の出版であった。

<sup>72</sup> 平和教育協会2013年挿絵集より転載の豊臣秀吉(1536年2月2日又は1537年3月26日～1598年9月18日)の画像。秀吉は、日本第二の偉大な統一者として又京都の諸寺の多くを建立した者として知られている。

<sup>73</sup> これら長崎で磔にされた26人のキリスト教徒について、詳しくは <http://www.newadvent.org/cathen/08297a.htm> を参照せよ。



## 秘密計画

「私は、国務長官スティムソンに日本のどこが軍需生産に力を入れているのかと訊ねた。彼は、直ぐに、多々ある中で広島と長崎の名を上げた。」<sup>74</sup> ハリー・S・トルーマン大統領



チャールズ・スウィーニー少佐は、広島と長崎の爆撃に両方とも参加した。<sup>76</sup> 何年も後に、スウィーニーは、彼の著書『戦争の終焉』の第1章冒頭で、6-6-6 文言入りの文章を記して死の血盟団の影響を明らかにした。そこで「爆弾は、組立小屋の中の架台にコンクリー座床から最低点で6インチ最高点で66インチの高さで据えられていた」と書いている。<sup>77</sup>

スウィーニーは、長崎が主要目標であったことや原爆が日本を21世紀世界統一政府の掌中に導入するために使われることを知る必要はなかった。<sup>78</sup> スウィーニーのように多くの者は、疑問を抱かず命令に従い、しばしば戦闘部隊がそうであるように任務の由来や最終目的を理解することなく命令に従うだけで、使い捨てにされる要員であった。

スウィーニー少佐は、広島には主要な軍需工場があり如何なる侵攻に対しても防衛できる第二方面軍の本部があったので原爆投下の目標になったと書いている。又スウィーニーは、新潟が日本の戦争継続

<sup>74</sup> ハリー・S・トルーマンの1953年1月12日付ジェームズ・L・ケイト教授宛書信より抜粋。「トルーマン大統領の原爆投下に対する反省」[Truman's Reflections on the Atomic Bombings]と題する書信全文は、<http://www.atomicarchive.com/Docs/Hiroshima/Truman.shtml>に掲載されている。

<sup>75</sup> ハリー・S・トルーマン大統領図書館(ミズーリ州インディペンデンス市)の提供による。この写真は、フリーメイソンの盛装でのトルーマン大統領を写しており、ヴァージニア州アレクサンドリアで1951年6月6日に撮影されたもので、<http://www.trumanlibrary.org/photographs/displayimage.php?pointer=3155&people=Truman%2C+Harry+S.%2C+1884-1972&listid=0>に掲載されている。

<sup>76</sup> スウィーニー他、前掲書、ix頁。同書で、スウィーニーは、広島と長崎の爆撃に両方とも参加した操縦士は自分だけだと誤って主張しているが、実際は他にも副操縦士のチャールズ・ドナルド・アルベリー[Charles Donald Albury](1920年10月12日～2009年5月23日)が両市への原爆投下飛行に参加している。

<sup>77</sup> 同上書、1頁。

<sup>78</sup> 統一世界政府に向けての十大経済圏は、1871年に三つの世界大戦を策定した死の血盟団の世界制覇計画の一部である。この十大経済圏ないし地域は、1973年9月17日にエデュアルド・ペステル[Eduard Pestel]とミハイロ・メサロヴィク[Mihajlo Mesarovic]による「ローマ・クラブ」(死の血盟団の偽装組織の一つ)の報告書『地球世界体制の地域分化・適応性モデル』["Regionalised and Adaptive Model of the Global World System"]で公表された。

に不可欠な工業生産地であったので当然そこも主要目標になっていたであろうと述べており、<sup>79</sup> 更に、もう別の高い軍事目標となっていた京都は、その宗教施設が日本国民にとって非常に重要であるが故に陸軍長官ヘンリー・スティムソンによって標的リストから外されたのだと記している。<sup>80</sup>



81

スティムソンは、イエール大学で秘密結社スカル・アンド・ボーンズに入会して 1888 年に卒業して、<sup>82</sup> 1945 年には、死の血盟団の幹部指導者となっていた。<sup>83</sup> 長崎よりはるかに大きな軍事的重要性をもつ複数の目標が標的リストから外され、日本キリスト教の総本山[訳注=原文では the Japanese Christian Vatican]長崎が、スティムソンにより死の血盟団のために加えられたのである。<sup>84</sup>

広島に対する原爆投下の公式説明では、1945 年 8 月 6 日に広島への正確な爆撃ができない場合は小倉市が第二の目標であったとのことであるが、<sup>85</sup> 広島にウラニウム原爆[訳注=原文では当時の暗号名を使った Little Boy atomic bomb]が投下された後の公式説明では、小倉市が次の原爆投下の第一目標になっていたとされている。この隠蔽工作の作り話は、アメリカ政府が小倉市上空の天候不良のために「デブ男」と呼ばれた第 2 原爆は長崎を標的にしたのだと云って長年巧妙に吹き込んできた説であった。<sup>86</sup> グローヴズ大将は、「小倉では、気象観測機[訳注=原文では単数での the weather plane]の報告に反して有視界爆撃が不可能だと分かった」と書いていた。<sup>87</sup> しかし、真相は、「デブ男」原爆搭載機の

---

<sup>79</sup> スウィーニー他、前掲書、149 頁。

<sup>80</sup> 同上、195 頁。スウィーニーは、「照準点[長崎]に対する私の最初の反応は死傷者が広島より更に大きくなりえると云うことで、次に思ったことは標的が小倉であったらと望んだことである」と書いています。

<sup>81</sup> 平和教育協会 2012 年挿絵集より転載の髑髏印ナチス帽。ヒットラーの親衛隊 SS と秘密結社スカル・アンド・ボーンズ共通のオカルト信仰は、前掲書「注意深きキリスト教徒」著作シリーズ第三巻で説明されている。

<sup>82</sup> スティムソン、前掲書。

<sup>83</sup> ヘンリー・L・スティムソンの経歴は、死の血盟団に仕える 3 人の大統領によって急上昇で進んだ。ハワード・タフト大統領は、スカル・アンド・ボーンズの一員であり 1911 年にスティムソンを陸軍長官に任命した。その後スティムソンは、陸軍長官として二人のフリーメイソン大統領フランクリン・ルーズヴェルトとハリートルーマンに仕えた。

<sup>84</sup> グローヴズ、前掲書、273 頁。グローヴズは、「私が原爆投下の標的都市リストを彼[スティムソン]に渡した時に、彼は直ぐに京都案に反対し承認しないと云った」と書いています。

<sup>85</sup> 機密扱いを解除された政府文書と写真類は [www.gwu.edu/~nsarchiv/NSAEBB/NSAEBB162/index.htm](http://www.gwu.edu/~nsarchiv/NSAEBB/NSAEBB162/index.htm) に転載されている。

<sup>86</sup> クレイグ、前掲書。77 頁で、クレイグは、長崎への原爆投下飛行に不可解に加えられた観察員らの存在を記述している。更に同書 83-84 頁、86-87 頁、102-103 頁には、ウィリアム・ローレンスが気象観測機「偉大なる芸人」[The Great Artiste]に搭乗していたと報じられている。

先を飛行した気象観測機[訳注＝原文では複数の the weather planes]の搭乗員たちによって小倉市上空の視界は良好と確認されていたのである。<sup>88</sup>



89

死の血盟団の影の手を世間から隠すために、公式見解は、小倉市上空を覆った雲のせいで同市への原爆投下ができなかったとし、挙げ句の果ては隣りの八幡市から出た大気汚染煙が小倉市を救うことになったのではなかろうかと云って民衆をたぶらかしてきた。

しかし、事実はきわめて複雑である。以下は、1945年のあの忌まわしい日につながる諸々の出来事を順序立てて説明するもので、恐ろしい出来事の時系列的真相である。

### ニューメキシコのジョルナダ・デル・ムエルト

最後の秒読みが始まると、マンハッタン計画の名士らの群集の中で軍関係者でもなくロス・アラモス国立研究所の科学者でもない一人の男がひときわ他の者たちから目立っていた。その男の名前はウィリアム・ローレンスで、彼は死の血盟団の高級幹部であった。<sup>90</sup>

1945年7月16日の早朝4時45分、150人余りの一団が立ちプルトニウム爆弾の初実験を息を殺して待っていた。<sup>91</sup>その中にはロス・アラモス研究所長のジュリアス・ロバート・オープンハイマー、実験責任者ケネス・ベインブリッジなど数多くの主要な研究者や軍幹部がいた。そこにもう一人、ニューヨーク・タイムズ紙のウィリアム・ローレンスと云う名前でも不可解にも報道記者団の一員と

---

<sup>87</sup> グローヴズ、前掲書、345頁。ローレンス、前掲書、235頁。

<sup>88</sup> 同上。ウィリアム・ローレンスも天気予報を確認して次のように記している―「我々が海岸線に向って飛行を始めた時は9時56分であった。気象偵察機から暗号通信が送られてきたので、それをカーリー軍曹が解読して、一番標的も二番標的もはっきり目視できると我々に伝えてくれた。運命の風は、特定されないままになるに違いない幾つかの日本の都市に幸運をもたらすようであった」と。ローレンスは、日常的に「運命」の語を使って陸軍長官ヘンリー・スティムソンや他の死の血盟団幹部らに言及していた。この点に分かると、同書235頁に記された「運命が長崎を最終標的に選んだ」と云う彼の文言が明確になるのである。

<sup>89</sup> 平和教育協会2013年挿絵集より転載。

<sup>90</sup> ユースタス・クラレンス・マリンス著『原子爆弾の秘史―なぜ広島はに破壊されたのか』[Eustace Clarence Mullins, *The Secret History of the Atomic Bomb: Why Hiroshima was Destroyed*, June 1998](<http://www.whale.to/b/mullins8.html>)を参照。死の血盟団は高度に慎重を要する任務には常に複数の要員をふり当てる。これは、長崎を破壊する爆撃作戦に少なくとも2人の要員が任務についていたであろうことを意味する。

<sup>91</sup> 死の血盟団宗教では、数字の13、7(特に繰り返される時)及び33が最初の原子核爆発の日付と時間を決定するのに使われた(例えば、04:45は4+4+5=13のように)。その他の「マジック」番号は、7+7+19=33のように、7月は7番目の月、16日を表わす数字は1+6=7であり、その年を表わす数字は1+9+4+5で19になると云う具合に使われたのである。

して選ばれた男がいたのである。<sup>92</sup>

ローレンスは、元々レイブ・ウルフ・スーと云う名前のリトアニア人で、レスリー・グローブス将軍がバーナード・バルークに命じられてニューヨーク・タイムズに託した死の血盟団要員であった。<sup>93</sup> 彼は、偽情報工作員としてうまく働き多くの宣伝記事を書いて「アトミック・ビル」のニックネームを得ていた。<sup>94</sup>

彼の最初の欺瞞工作は、「三位一体爆発」についての新聞発表であろう。キリスト教では「聖なる三位一体」は父なる神・子なる神・精霊であり、要するに「生きるもの全ての力」を表わす語句であるから、原爆実験を「三位一体爆発」とするのは神を冒瀆する表現である。<sup>95</sup> 神が創造したものの全てを破壊する力を持つ爆弾を「三位一体」と呼ぶのは、明らかに攻撃的な侮辱であった。

現地時刻 5 時 29 分に原爆装置は爆発させられた。



96

---

<sup>92</sup> ベヴァリー・ディーペ・キーヴァー著『ニュース・ゼロニューヨーク・タイムズと原爆』 [Beverly Deepe Keever, *News Zero: The New York Times and The Bomb*, Monroe, Maine: Common Courage Press, 2004]を参照せよ。キーヴァーの著書は、主要な報道部署に入り込ませた喋報工作要員らによってマンハッタン計画の報道を抑え真実を隠蔽させる協働工作がなされたことを伝えている。

<sup>93</sup> ロバート・J・リフトン、グレッグ・ミッチェル著『アメリカにおけるヒロシマ否定の半世紀』 [Robert J. Lifton and Greg Mitchell, *Hiroshima in America: A Half Century of Denial*, New York: Avon Books, 1995]、120 頁。マリンス、前掲書では、次のように記されている—「バルークは、マンハッタン計画の総務監督としてレスリー・グローブズ少将を、科学陣監督としてロバート・オッペンハイマーを選んだ…その上で、バルークは、彼のワシントンでの代理人ジェイムズ・F・バーンズが委員長を務める大統領の国防調査委員会を通して原爆に関する決定内容を指示し続けた」と。他方グローブスは、ジャック・ロックハートがウィリアム・ローレンスを推挙したと主張してバルークの影響を隠そうとした。グローブス、前掲書、325-327 頁。そこでグローブスは次のように記している—「諸々の手配を検討する中で、ローレンスをニューヨーク・タイムズに雇われたままにしておいて彼の経費を MED に賄わせるのが雇用者にとっても容易であるし秘密保持の理由からも望ましく思えた」と。又、ローレンス、前掲書、vii 頁では、「我が生涯に多くの好機を与えてくれたレズリー・R・グローブス少将に高い尊敬と深い感謝を捧げる」と記して、ローレンスはグローブス将軍に謝意を表し両者の関係を認めている。

<sup>94</sup> キーヴァー、前掲書。

<sup>95</sup> ローレンス、前掲書、13 頁。ローレンスは、三位一体爆発を宗教的経験と評し、彼の好みとする死の血盟団崇拜のプロメテウスを繰り返し引き合いに出している。そこで彼は次のように述べる—「プロメテウスは、禁令を破って地球に新しい火をもたらした。その火は、今や、50 万年ほど昔に彼が人類の利益のために神からかすめ盗った原火より 300 万倍も強力な火になった」と。プロメテウス物語には、古代史上ヘシオドス、ホメロス、ピンダロス、ピタゴラスと 4 人の史料源があるが、前掲書 163 頁でローレンスは次のように述べている—「自然に挑戦する人類精神の永遠の記念碑になると云えるこれらプロメテウスの構造では、強力な宇宙の諸力は、この惑星上での 100 万年の人類史上で、又恐らく 20 億年の地球史上でも、決して解き放たれることがなかったほど強力になっている」と。同じく、リフトン、ミッチェル、前掲書、15-18 頁を参照せよ。

<sup>96</sup> 平和教育協会 2013 年写真集より転載。「三位一体爆発」の及ぶ全体地域内のニューメキシコ州ホワイトサンズで作られた写真。

TNT 火薬換算で 20 キロトンほどの威力を持つ爆弾は、砂漠に深さ 10 フィート、直径 1,100 フィートの放射能を帯びたガラス状の窪地を残した。爆発の際には周囲の山が 1~2 秒間「日中より明るく」輝き、観測基地では熱気が「オープンと同じくらい熱かった」と報告されている。爆発の衝撃波は 100 マイル以上遠方まで轟き、きのこ雲が 7.5 マイルの高さにまで達していた。<sup>97</sup>

この「三位一体爆発」を目撃したロス・アラモス国立研究所長 J・ロバート・オッペンハイマーは、実験を見つめながら、ヒンドウ教の聖典バガヴァド・ギーターの詩句「我は死なり世の破壊者なり」が心に浮かんだと後に述べている。<sup>98</sup>

ローレンスは、不可解にも、通常では国家機密事項の取扱許可も得られない外国人であるにも拘わらず、数週間後に広島と長崎への原爆投下飛行に参加する許可を得た唯一の民間人とされた。<sup>99</sup>

ローレンスは、広島爆撃に向かう B-29 爆撃機に同行する観測機に搭乗する許可を得ていたが、搭乗機の出発に間に合わず当の爆撃機が離陸するところしか見られなかったと述べている。<sup>100</sup> しかし、ローレンスは民間人として軍法会議にもかけられず何ら処罰も受けなかったのである。

原爆投下作戦に参加した者は、各自が非常に特殊な役割を受け持った。死の血盟団にとって、ローレンスの極秘長崎作戦は、陽動作戦ではあるが危険な広島爆撃に彼を参加させるには余りにも重要すぎた。

死の血盟団の要員は非常に狡猾で、当時の幹部らは「リーダーシップ法則」と呼ばれたマーケティングの原理を理解していた。<sup>101</sup> このマーケティング原理によると、人々は新しい分野での初めての出来事は記憶に留めるが、同じ分野での二番目の出来事になると最初の場合ほど注意を払わない。例えば、ニューヨークからパリまで最初に単独飛行した人の名前を問われると、多くの人は正解のチャールズ・リンドバーグを答えられる。しかし、大西洋を二番目に単独飛行した人の名前を問われると、殆どの人は答えを知らないであろう。<sup>102</sup> この原理を理解することは、なぜ広島を最初の目標にすることで実際はそれが真の目標を隠す陽動作戦上の目標になるかを理解する決め手になる。

他方、ローレンスは、広島への飛行を逃すことによって、密かに血盟団のために長崎を主要目標とする作戦を担っていた陸軍長官ヘンリー・スティムソンからの極秘命令を作戦機に伝達する役目を

---

<sup>97</sup> ローレンスの原爆崇拜は前掲書『アメリカにおけるヒロシマ』の 18 頁にも記述されており、又同書 74 頁には彼と原爆製造者らが「三位一体」実験成功の後で「原始時代の火踊り」を踊ったことが描かれている。

<sup>98</sup> 1948 年『タイム』誌上での J・ロバート・オッペンハイマー会見記事と 1965 年ドキュメンタリーテレビ番組『原爆投下の決定』[*The Decision to Drop the Bomb*]。オッペンハイマーがヒンドウ教聖典の詩句を述べくだりの録画ビデオは <http://www.atomicarchive.com/Movies/Movie8.shtml> に掲載されている。

<sup>99</sup> ローレンス、前掲書、216 頁では次のように記されている—「勿論そのニュースは当時まだ最高機密であったが、自分が見聞したことは何でも全て報道記事の形で用意するのが私の仕事であった。それをモイナハン少佐にわたし事前検閲を受けてからグローブス将軍に送ると、彼は「極秘」印を押して保管庫に入れ施錠して大統領が公式に発表するまで取り出すことはなかった」と。

<sup>100</sup> グローブス、前掲書、326-327 頁。グローブスは、ローレンスが「広島爆撃飛行の観測機に乗るには一寸遅かったが、それが離陸態勢に入っている様子を目撃するには遅すぎない」で飛行場に到着した、と書いている。

<sup>101</sup> アル・リーズ、ジャック・トロウト著『マーケティングの 22 不変法則—リスク覚悟で破ってみよ』[Al Ries and Jack Trout, *The 22 Immutable Laws of Marketing: Violate Them at Your Own Risk!*, New York: Harper Collins Publishers, 1993]、3 頁。

<sup>102</sup> 同上。答えは、1927 年 5 月 20-21 日のリンドバーグ飛行に続いて同年 6 月 6 日に単独横断飛行に成功したクレアレンス・ダンカン・チェンバリン[Clarence Duncan Chamberlin]で、彼の飛行目的は乗客を一人乗せていたのでリンドバーグとは違っていた。

遂行できたのである。<sup>103</sup>

原爆投下作戦機の機長チャールズ・スウィーニー少佐や他の殆どの搭乗員は、ローレンスが担った特別の任務を決して知ることはなかった。原爆投下の責任者である上官のアシュワース中佐のみが陸軍長官スティムソンの極秘命令書を見ればよかったのである。<sup>104</sup>

やがて、死の血盟団の新兵器が、ほんの一秒たらずで、それまで他の者たちが何世紀にもわたって試みてきたこと、即ち日本のキリスト教を跡形もなくなるほどに潰してしまう作業を遂行することになる。

小倉市上空は快晴で良好な作戦天候であるとの報告を受けていながら、アシュワース中佐が命令に反してレーダー使用で原爆「デブ男」を投下するのを許可しなかったので、スウィーニー少佐らの作戦機は小倉周辺を三度旋回した。<sup>105</sup>

すると、アシュワースは、スウィーニー少佐に爆撃機を長崎へ向かわせるよう命じた。<sup>106</sup> 奇妙なことに、その時彼は、それ以前の命令とは裏腹に、スウィーニーと爆撃手に「レーダー使用を準備せよ」と命じたのである。<sup>107</sup> アシュワース中佐はこの作戦の指揮官であったので、スウィーニー少佐と爆撃手は、この新たな指令が標的の目視確認なく原爆投下をしてはならないと云う極めて明確な本来の命令に反することを知りながらもアシュワースに従った。<sup>108</sup>

---

<sup>103</sup> リフトン、ミッチェル、前掲書、17 頁。長崎爆撃作戦に先立ち、ローレンスは「原爆にする臨界質量のプルトニウムを入れた 13 ポンドの容器を誇らしげに手でつかんだ」と書かれている。バーナード・バルークとヘンリー・スティムソンの関係は長く、二人はアメリカを第一次世界大戦と第二次世界大戦に引き込む役目を果たしたが、それをするにはスティムソンが 1911 年から 1913 までと 1940 年から 1945 まで米国陸軍長官であったことが重要である。

<sup>104</sup> ローレンスの任務は決して公表されることはなかった。極秘命令を受け取った際は直ちに命令書自体を破棄するのが常であるから、それが歴史的記録として残ることはない。ローレンスとアシュワースの役割は、故意に事態を混乱させることであった。明らかな事実は、ウィリアム・ローレンスとフレデリック・アシュワースが秘密を守ったことで褒賞を受け、又スティムソンも、望んだ通り長崎を高度の軍事目標以上に破壊したことで名声を博する役職を与えられて海軍中将の地位に昇進した。

<sup>105</sup> スウィーニー他、前掲書、213-216 頁。

<sup>106</sup> 『ニューヨーク・タイムズ』2005 年 12 月 8 日付リチャード・ゴールドステインの記事「フレデリック・L・アシュワース、93 歳、原爆取扱人死去」[Richard Goldstein, "Frederick L. Ashworth, 93, Atomic Bomb Handler, Dies," *The New York Times*, 8 December 2005], <http://www.nytimes.com/2005/12/08/national/08ashworth.html>。

<sup>107</sup> 同上。

<sup>108</sup> 同上、及びスウィーニー他、前掲書、217 頁。スウィーニーはレーダーの精度に関してアシュワースに応答して云った「我々は、間違いなく、標的の 500 フィート以内に到達しますよ」と。この長崎への原爆投下作戦機の搭乗員名簿は、階級順に以下の通りである。— F・L・アシュワース米国海軍中佐・原爆投下調整官、チャールズ・スウィーニー少佐・機長、ジェームズ・F・ヴァンペルト大尉・航空士、カーミット・ベーハン大尉・爆撃手、チャールズ・ドナルド・オルベリー中尉・副操縦士、ジェイコブ・ベザー中尉・レーダー対応官、フィリップ・M・バーンズ少尉・原爆投下調整官助手、F・J・オリヴィア少尉・副操縦士、ジョン・D・クハレック曹長・航空機関士、エドワード R. バックリー二等軍曹・レーダー操作手、アルバート・T・ダハート三等軍曹・中央統制射撃手、エイブ・M・スピッツァー三等軍曹・通信士。



109

長崎上空は 6,000 フィートから 8,000 フィートの高度で 80~90% の積雲が覆っていた。<sup>110</sup> そこで長崎での標的にレーダーの照準を当てたことは、予めアシュワースが日本の基督教の中心地を主要な爆撃目標に特定したレーダー使用の極秘命令を受けていたかのように行動したことを示している。<sup>111</sup> 「ボックの車」として知られた B-29 爆撃機が爆弾投下口を開けると、爆撃手のカーミット・ビーハンが雲の切れ間に一瞬長崎が見えたと声を上げた。



112

その時ビーハンは「見つけたぞ! 見つけたぞ!」と云って、午前 11 時 1 分に原爆を投下した。<sup>113</sup>

---

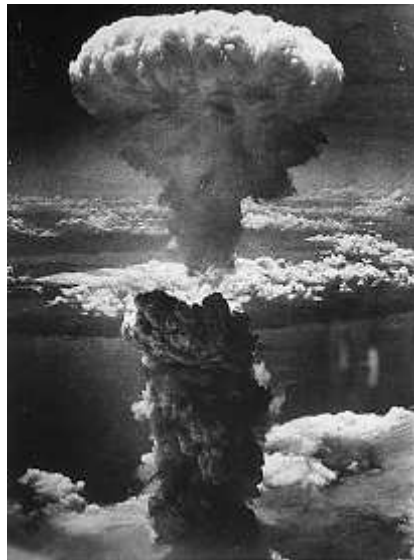
<sup>109</sup> 米国政府の「爆撃手」写真により平和教育協会 2013 年作成の挿絵写真。

<sup>110</sup> スウィーニー他、前掲書、216 頁。

<sup>111</sup> アシュワースは、秘密を守ったことで報いられて米国海軍中将の地位に昇進した。

<sup>112</sup> 米国政府の写真に基づき平和教育協会 2013 年作成のカーミット・ビーハンの挿絵写真。

<sup>113</sup> スウィーニー他、前掲書、179 頁、217 頁。なお 191 頁でのスウィーニーの記述によると、目標の直撃とは、狙った標的辺りの上空 500 フィートから 1,890 フィートまでの高度で設定された複数の導火線(例えば設定時刻稼働装置、電波探知機、気圧計などに連動したもの)による爆発と規定されている。この標的上空 500~1,890 フィートの高度での爆発を直撃とする公式規定に合わせると、原爆「デブ男」の爆発点から下方 1,890~2,390 フィート間の地上対象が直撃標的となる。この原爆によって発生した乱気流に続いて、「ボックの車」搭乗員らは別の重大な飛行障害に直面した。基地に帰還するのに必要な飛行燃料が、三つの理由で足りなかったのである。まず、スウィーニーらは、機械的な問題で予備燃料 600 ガロンを補給できずテニアン島基地を出発した。次に、ジェームズ・I・ホブキンズ大佐が操縦する「ビッグ・スティック」[訳注=同行して原爆投下を撮影し核爆発の科学的観察を行う任務の B-29 観測機]が予定通り屋久島周辺で「ボックの車」に合流できなかった。三つ目の理由は、アシュワース中佐が当初予定された小倉での原爆投下をさせなかった[訳注=故に、長崎への飛行は当初予定された飛行距離を越える余計な飛行になった]。



114

11時2分、原爆「デブ男」が爆発した時には、長崎の街の大半が一瞬にして壊滅し、推定73,884人が殺されたのである。<sup>115</sup>



116

最初の犠牲者の中には、連合国軍捕虜、日本のキリスト教徒、奴隷化された1万人以上の朝鮮人たちがいた。<sup>117</sup>

---

<sup>114</sup> 米国国立公文書館の提供による1945年8月9日第509混成部隊により撮影の米国政府写真。なお、長崎での原子爆弾爆発のビデオは <http://www.thesecretofnagasaki.com/nagasaki detonation.htm> に掲載。

<sup>115</sup> 広島市長崎市原爆災害誌編集委員会編、石川永世、デビッド・L・スワイン訳『広島・長崎—原子爆弾の物理的・医学的・社会的影響』[Edited by the Committee for the Compilation of Materials on Damage Caused by the Atomic Bombs in Hiroshima and Nagasaki, translated by Eisei Ishikawa and David L. Swain, *Hiroshima and Nagasaki: The Physical, Medical, and Social Effects of the Atomic Bombings*, New York, Basic Books, Inc., 1981] [訳注＝日本語原書は『広島・長崎の原爆災害』(岩波現代文庫・学術149)岩波書店、1979年]、115頁。広範囲な破壊の実態を知るには、114頁と353頁の追加統計資料を見よ。例えば、長崎原爆資料館は、1945年8月6日当時の人口を240,000人としており、推定73,884人の死者に加えて、74,909人が負傷し120,820人が放射線による被害を受けた。

<sup>116</sup> 平和教育協会2013年写真集より長崎の「外国人戦争犠牲者追悼—核廃絶人類不戦」碑。

<sup>117</sup> 在日朝鮮人の人権を守る長崎協会が1979年8月9日に建てた「朝鮮人原爆犠牲者の碑」による。



1910(明治43)年8月22日、日本政府は「日韓併合条約」を公布し、朝鮮を完全に日本の植民地支配下に置いたため、自由も人権も、さらに貴重な土地も奪われ、生活の手段を失った朝鮮人たちは日本に流入した。その後、日本に強制連行され強制労働させられた朝鮮人は、1945(昭和20)年8月15日の日本敗戦当時は、実に2,365,263人、長崎県全体に在住していた朝鮮人は約7万人という多数に上った(内務省警保局発表)。そして長崎市周辺には約3万数千人が在住し、三菱系列の造船所、製鋼所、電機、兵器工場などの事業所や周辺地区の道路、防空壕、埋立て等の作業に強制労働させられ、1945(昭和20)年8月9日のアメリカ軍による原爆攻撃で約2万人が被爆し、約1万人が爆死した。

私たち、名もなき日本人がささやかな浄財を拠出して異郷の地長崎で悲惨な生涯を閉じた1万余の朝鮮人のために、この追悼碑を建設した。かつて日本が朝鮮を武力で威かくし、植民化し、その民族を強制連行し、虐待酷使し、強制労働の果てに遂に悲惨な原爆死に至らしめた戦争責任を、彼らにおわびすると共に、核兵器の絶滅と朝鮮の平和的な統一を心から念じてやまない。

1979年8月9日  
長崎在日朝鮮人の人権を守る会

カトリック大聖堂の上空での爆発は、即座に、事態の公式説明の何かが明らかに間違っていたことを後日この戦争犯罪を調査することになる人達に示す決定的な証拠になった。長崎の収容所に抑留されていた戦争捕虜たちは、極悪状態の中で生き残ろうとしていたのに監視の日本兵らもろとも焼き殺されたのである。

原爆「デブ男」は、トルーマン大統領が述べた公式の投下目標地点から非常に離れたところで爆発していた。この原爆計画に係わっていたオッペンハイマーたちは、二発の原爆が主として民間人を対象に使われる場合と方法について騙されていたことに気づいた。<sup>119</sup>



120

<sup>118</sup> 平和教育協会 2013年写真集より「朝鮮人原爆犠牲者の碑」の碑文。

<sup>119</sup> リフトン他、前掲書、30頁。広島と長崎に落とされた原爆は両方とも、これと云った軍事基地や工場からは何マイルも離れた所で爆発した。原爆による死傷者を最小限度にするためにと、当時オッペンハイマーや他の科学者たちは、原爆が軍事目標を狙って、しかも子供たちが熱と放射線から少しでも保護されるように夜家で眠っている時間帯に投下されるものと信じこむよう仕向けられてきた。この間の事情は、1945年8月6日、最初の原爆投下後にグローブス将軍とオッペンハイマーが交わした次のようなやりとりによく表われている。— グローブス将軍：「明らかにすさまじい爆発でしたよ！」オッペンハイマー：「それは何時でしたか、日没後でしたか？」グローブス将軍：「いや、残念ながら作戦機の安全のために日中にやらねばならなかったし、実際いつ落とすかは現地の指揮官にまかせていたのでね・・・」

<sup>120</sup> 浦上天主堂の破壊の様子を示す写真をもとに平和教育協会 2013年作成の挿絵。

長崎に対する原爆投下の後、死の血盟団のメンバーらは、この原爆投下の真相を隠蔽する世論工作を開始した。これには、長崎を原爆投下の標的にした決定責任をロス・アラモスの標的委員会になすりつけ、この委員会に公の関心を集中させる宣伝工作もあった。

「原子爆弾の父」として知られる J・ロバート・オッペンハイマーは、マンハッタン計画の科学指導者であった。しかし、彼は、公的にはロス・アラモス標的委員会の委員長ではあったが、決して長崎を標的に勧めることはなかった。<sup>121</sup> むしろ、死の血盟団やそのキリスト教壊滅計画を知らずに務めていた他の多数の者達と同様に、オッペンハイマーは、原爆「デブ男」を爆発させたところが長崎であったことを知った時には本当に驚愕したのである。<sup>122</sup> 長崎の町が崩壊した後、オッペンハイマーは、トルーマン大統領と会い、「大統領、私は自分の手に血糊がついているような感じがします」と述べた。<sup>123</sup>

オッペンハイマーが長崎についての衝撃を訴えていた頃、米国陸軍の対日諜報専門員でオッペンハイマー委員会の一員として務めていたエドウィン・O・ライシャワーが小倉と長崎を標的にする上で決定的な役割を果たしたとの偽報道も流された。<sup>124</sup>

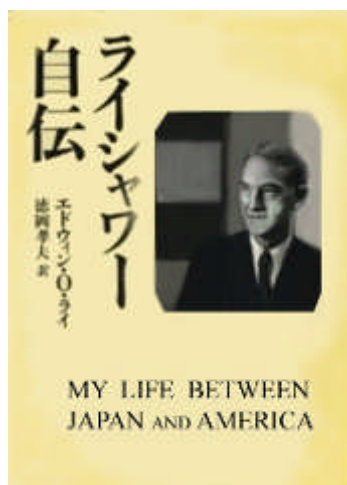
---

<sup>121</sup> J・A・ダリー少佐、N・F・ラムズビー博士の L・R・グローヴズ将軍宛連絡通信「1945年5月11日付標的委員会の概要」。出所は RG 77, MED Records, Top Secret Documents, File no. 5d 及び <http://www2.gwu.edu/~nsarchiv/NSAEBB/NSAEBB162/6.pdf>。標的選択チームは次のように記述している。「本会議出席者は、我が兵器の標的として先ず以下の4都市を選択すべしと勧告する。— a.京都、b.広島、c.横浜、d.小倉の軍需工場地帯」なお、当該チームは第5標的として宮城に次いで新潟を挙げていた。1945年5月29日付文書「第509混成部隊—特殊任務」を見よ。この解禁機密文書は <https://www2.gwu.edu/~nsarchiv/NSAEBB/NSAEBB162/10.pdf> に掲載されている。

<sup>122</sup> 長崎が破壊された後、血盟団は、長崎に原爆投下を決定したのはロス・アラモスの標的委員会だと主張して真相隠蔽を図った。血盟団のキリスト教を破壊する計画が知られると、ユダヤ人のオッペンハイマーが長崎を破壊しキリスト教を標的にしたユダヤ人として誤って非難される恐れがあった。しかし、血盟団の役割は20世紀中隠され続けてきたので、オッペンハイマーがキリスト教を破壊しようとしたとの非難はされなかった。オッペンハイマーが如何に身代わりにされやすい立場にいたかを理解すれば、何故彼が最初の原子爆発を「三位一体爆発」と命名した人だと誤って主張されているかが明らかになる。オッペンハイマーの死後、「三位一体爆発」の近くに史的な標識が建てられ、それには「核時代は1945年7月16日にこの三位一体史跡で世界初の原子爆弾が爆発して始まった。この史跡は、J・ロバート・オッペンハイマーによって「三位一体」史跡と命名されたとも云える・・・」と記している。血盟団指導部は、オッペンハイマーが後に水素爆弾に反対したので彼を憎悪し、ソ連のスパイとして糾弾されるように仕向けて彼の経歴を抹殺した。

<sup>123</sup> ピーター・J・クズニック著「悲劇的人生—オッペンハイマーと原爆」、『軍備管理協会』、2005年7-8月号 [Peter J. Kuznick, "A Tragic Life: Oppenheimer and the Bomb," *Arms Control Association*, July/August 2005]。 [http://www.armscontrol.org/act/2005\\_07-08/Kuznick](http://www.armscontrol.org/act/2005_07-08/Kuznick) で閲覧可能。

<sup>124</sup> エドウィン・オールドファーザー・ライシャワー(1910年10月15日～1990年9月1日)は、1961年から1966年までの駐日米国大使であった。1964年3月24日に東京で暗殺されそうになったが生き残った。しかし、彼はその時の救命輸血で感染した肝炎で26年後に死亡した。もしライシャワーが1964年に死んでいたら、恐らく彼は原爆の標的として京都をはずし長崎を選択した公的人物とされていたであろう。その理由は、1958年にロベルト・ユンクの著書『千の太陽より明るく輝いて—原子科学者たちの個人史』 [Robert Jungk, *Brighter Than a Thousand Suns: A Personal History of the Atomic Scientists*, New York: Harcourt Brace, 1958] がドイツ語原書 [訳注=原書は Robert Jungk, *Heller als tausend Sonnen. Das Schicksal der Atomforscher*, Stuttgart, 1956] から英語に翻訳されたことである。この著書178頁で、ユンクは次のように記述している—「短い原爆標的リストに広島、小倉、新潟に加えて日本の諸寺院都市・京都があった。日本専門家のエドウィン・O・ライシャワー教授は、この恐ろしいニュースを聞いて陸軍情報部の上司アルフレッド・マッコーマック少佐の執務室に突入した。ライシャワーは、あまりのショックでわっと泣き出していた。教養のある人道的なニューヨークの弁護士であったマッコーマックは、そこで、何とか陸軍長官スティムソンを説得し京都を執行猶予にして原爆投下のブラックリストから削除させたのである」と。他方、ライシャワーは、暗殺攻撃に生き残った



125

しかし、結局戦後には秘密拘束も解かれることになり、ライシャワーは、レズリー・M・グローヴス将軍のように自叙伝の中で、長崎を壊滅させる決定を下したのは陸軍長官ヘンリー・ルイス・スティムソンであったと暴露した。<sup>126</sup>

---

ので、ユンクのこの誤った陳述に反論することができた。1986年に、ライシャワーは、自叙伝(前掲書)を出版し、その101頁でユンクの陳述に反駁して次のように書いている—「もし私にあのようにする機会があれば、恐らく私はそうしていただろう。しかし、あの陳述には事実のひとつかけらもない。京都の同志社にいる私の友人オティス・ケアリーが十分に証明しているように、京都を破壊から救ったと云えるに値する人は、当時の陸軍長官ヘンリー・L・スティムソン唯一人である。彼は、それより数十年前の新婚時代から京都を知っており賞賛していたのですから・・・」と。事実、スティムソンは1920年代に3度日本を訪れているのである。

<sup>125</sup> ライシャワー前掲書の日本語訳書表紙。

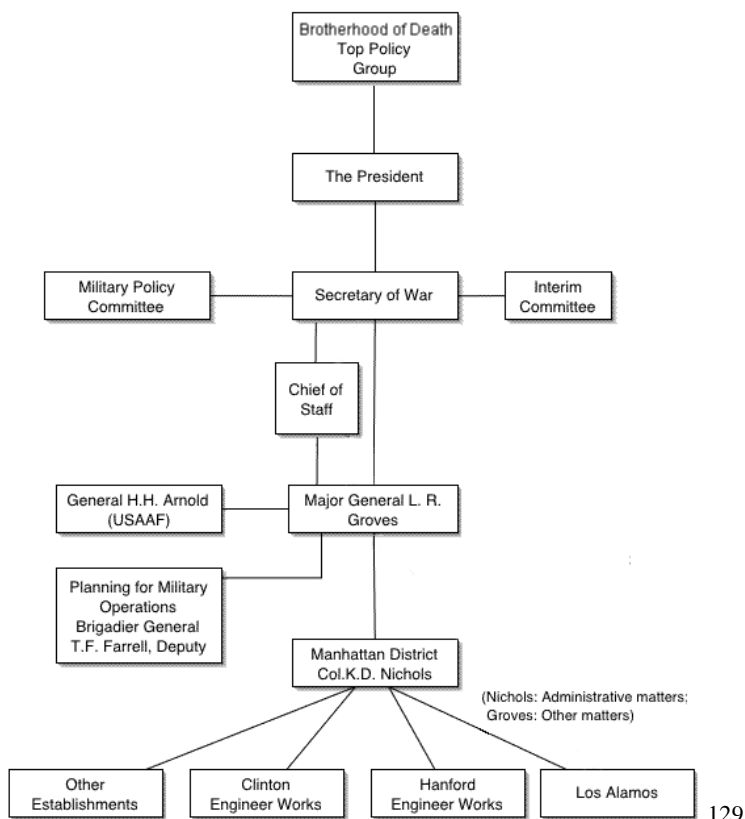
<sup>126</sup> 同上、101頁。ライシャワーは次のように書いている—「最初の原爆に何か正当化できる理由づけが可能であったとしても、8月9日に長崎に落された二番目の原爆には何の理由づけもできない」と。更に、彼は、「京都を破壊から救ったと云えるのは、ヘンリー・L・スティムソン唯一人である・・・」と記している。

なお、原爆使用の是非や使用法に関する当時米国首脳部内での論議については、スティムソン陸軍長官の下での暫定委員会の1945年5月31日付会議記録[Notes of the Interim Committee Meeting] <http://www2.gwu.edu/~nsarchiv/NSAEBB/NSAEBB162/12.pdf> を参照せよ。この暫定委員会の当日出席委員は、ヘンリー・L・スティムソン、ラルフ・A・バード[Ralph A. Bard]、ヴァネヴァー・ブッシュ[Vannevar Bush]、ジェーム・F・バーンズ[James F. Byrnes]、ウィリアム・L・クレイトン[William L. Clayton]、ジェームズ・B・コーナント[James B. Conant]、カール・T・コンプトン[Karl T. Compton]、ジョージ・L・ハリソン[George L. Harrison]であった。加えて、招致科学者としての参加者は、J.ロバート・オッペンハイマー、エンリコ・フェルミ[Enrico Fermi]、アーサー・H・コンプトン[Arthur H. Compton]、E・O・ローレンス[E. O. Lawrence]で、その他招致参加者として、ジョージ・C・マーシャル元帥[General George C. Marshall]、レズリー・R・グローブス少将、ハーヴェイ・H・バンディ[Harvey H. Bundy]、アーサー・ページ[Arthur Page]がいた。

『歴史ニュース・ネットワーク』[History News Network] 2010年2月14日付スティーヴ・ラブスンの報道記事「1965年の秘密メモ、米国が沖縄の日本復帰後もその基地と核兵器保持の選択権を維持する計画を明らかにした」[Steve Rabson, "Secret 1965 Memo Reveals Plans to Keep U.S. Bases and Nuclear Weapons Options in Okinawa After Reversion" (<http://hnn.us/article/122970>)]及び『タイム』誌1981年6月8日号の記事「日本—白状すべき時だ」["Japan: Time to Confess," *Time Magazine*, 8 June 1981]によれば、1960年に日米安保条約の調印に際して、米国は日本に核兵器を「持ち込み」或いは配備しないことに合意した。しかし、1965年7月16日、東京のアメリカ大使館で、エドウィン・O・ライシャワー大使は米国が沖縄で核兵力を永続的に保持する戦略を紹介した。この核の秘密は、1981年に元米国大使ライシャワー自身が毎日新聞とのインタビューで日本の港に入港する米国海軍の艦船が平常的に1960年の核兵器禁止の取り決めに破ってきたことを明らかにして公開情報になった。

スティムソンは、グローヴス将軍に対して「これは私自身が解決すべき問題だ」と云った。<sup>127</sup> 歴史上の記録では、長崎を第一ないし第二の原爆投下目標に選んだのはオッペンハイマーでもライシャワーでもなく又グローヴス将軍でもなかったことは明確である。<sup>128</sup> 死の血盟団が望み且つ意図したように、偽の投下目標の選択は死の血盟団の幹部要員が長崎を選んだ事実から世間の関心をそらす働きをしたのである。

下図は、グローヴズの著書『今や語りえること』で示されたものから作った組織図である。グローヴズの本図では最上部に「最高政策グループ」と表示されているが、本図はこの「最高政策グループ」が実際は誰に仕えていたかを示すために「死の血盟団」の一句をそこに付加してある。



ハリー・S・トルーマンは、フリーメイソン高級幹部であり第33代アメリカ合衆国大統領でもあった。<sup>130</sup> 又、ヘンリー・ウォレスもフリーメイソン高級幹部で第33代合衆国副大統領であった。「賢人」バーナード・バルークや「ボンズマン」[訳注=秘密結社 **Skull and Bones** 成員の別称]の陸軍長官ヘンリー・スティムソンと一緒に、死の血盟団が原爆作戦の指揮系統を牛耳っていたことが分かる。

127 グローヴズ、前掲書、273 頁。

128 同上、2 頁。グローヴス将軍は、簡略化したマンハッタン計画の組織図を作っており、それは <http://www.atomicarchive.com/History/mp/orgchart.shtml> に掲載されている。下図は、それを修正してマンハッタン計画を遂行する死の血盟団の組織系統図を示したものである。そこでグローヴス将軍より上位の統括指導部は通常フリーメイソン団を通して死の血盟団に仕えるものであった。

129 「最高政策グループ」に「死の血盟団」を付加し修正した平和教育協会 2013 年の説明図。

130 ペンシルヴァニア州フリーメイソン大本部のインターネット・ホームページ(The Grand Lodge of Free and Accepted Masons of Pennsylvania) <http://www.pagrandlodge.org/mlam/presidents/truman.html> でハリー・S・トルーマン(1884 年 5 月 8 日～1972 年 12 月 26 日)についての詳細なフリーメイソン経歴が紹介されている。



ウィリアム・ローレンスは、長崎が破壊された後で、「デスティニーが長崎を最終標的に選んだ」と書くことになる。<sup>132</sup> 死の血盟団の信条では、「デスティニー」[訳注＝原文では "destiny"、脚注 132 のローレンスの表現によれば「物事の成り行きを決定する新たな生き物」と云うことになる]は血盟団員間の任務や関与をやり取りする文書に使われるので、ローレンスがこの「デスティニー」なる言葉を使ったことは極めて意味深長である。

なお、死の血盟団は、広島への原爆投下後も日本指導部がどうしても直ちに降伏できないように動いた。<sup>133</sup> フリーメイソンのカーチス・ルメイ大將は、8月7日に152機のB-29を、8月8日には375機のB-29を出撃させて日本の諸都市を焼夷弾爆撃したのである。<sup>134</sup>

---

トルーマンは決して大学の学位を得ていなかったが、彼が秘密結社に仕えたためにアメリカ大統領(1945～1953年)になった。彼は、第33位のフリーメイソン成員で、1909年2月9日にミズーリ州ベルトンのベルトン支部第450集会所で入団した。1911年に、彼はミズーリ州グランドビューでグランドビュー支部第618集会所の初代支部長になった。1940年9月24～25日には、トルーマンはミズーリ州のフリーメイソン団97代目の本部長に選ばれた。彼は、1945年10月19日に首都ワシントンで最高査察総監[Sovereign Grand Inspector General]、フリーメイソン最高会議の第33位名誉会員になった。1959年5月18日には、トルーマンは、米国大統領で唯一人のフリーメイソン50年賞が贈られた。1953年1月7日、首都ワシントンでのトルーマン大統領最後の一般教書演説で、彼は次のように述べている—「今や我々は、原子力時代に入った。そして、戦争は従来とは非常に異なるものに変える科学技術の進歩を受けてきた…。将来の戦争は、世界の大都市を消滅させ、過去の文化的成果を一掃し、これまで数百世代を通し苦勞して徐々に築き上げてきた文明の構造そのものを破壊することができるほどになるであろう。かような戦争は、理性的な人間がとりえる政策ではない」と。ここで、死の血盟団員としての彼の役割を想起すれば、上述のような彼の意見はよりよく理解できるであろう。即ち、トルーマンは、日本で「苦勞して徐々に築き上げてきた」宗教の構造そのものを破壊するために原子爆弾が使用されることを知っていたのである。何故、彼は日本でのキリスト教中心地が破壊されるのを容認したのか、彼がそれを質されるような公の記録なしで、トルーマンは1972年に死去した。

<sup>131</sup> 1945年にテニアン島にいたウィリアム・ローレンスの米国政府写真から作成した平和教育協会2013年写真集より転載。

<sup>132</sup> ローレンス、前掲書『目撃者の報告』で、ローレンスは次のように記述している—「それは、まさに我々の疑い深い眼前に現れた生き物、新たな種類の存在であった」と。

<sup>133</sup> 同上。ローレンスは、日本の指導部に無条件降伏を発表する時間を与えるために1945年8月7～8日には爆撃を停止したと云う偽情報を広める手助けをした。又、ローレンスの仕事は、広島と長崎での戦争捕虜の死を隠すことにも係わった。少なくとも12人のアメリカ人捕虜が原爆により命を失っているが、詳細については、森重昭著『原爆で死んだ米兵秘史』(東京、光人社、2008年)又は同書を詳細に紹介した <http://powresearch.jp/news/wp-content/uploads/hibaku-amerikahei-horyo.pdf> 及び <http://www.us-japandialogueonpows.org/HoroshimaPOW-J.htm> を参照せよ。

<sup>134</sup> スウィーニー他、前掲書、179頁。



135

他方日本側では、切迫した情勢下で8月9日に当時の国家指導者らが急遽集合し最高戦争指導会議・閣議・御前会議と密議を重ねて遂に降服やむなしとポツダム宣言の受諾を決め、翌8月10日に連合国側にそれが伝達された。

原爆投下のような極めて恐ろしい行為に対して一様にアメリカ市民を責めるのは甚だ不当であろう。海軍大将ウィリアム・D・リーヒーは、原爆の使用を強く非難した多くのアメリカ人の一人であり、次のように述べている。—「この新兵器を爆弾と呼ぶのは間違いである。それは、爆弾ではなく如何なる爆発物でもない。それは、本来の爆発力によるよりも、その致命的な放射能反応で人々を殺す有害物質である。それを最初に使うことによって、我々は暗黒時代の野蛮人に共通する倫理基準を採用してしまったと私自身は感じている。私は、このような仕方戦争することを教えられなかったし、婦女や子供を殺傷することで戦争に勝つことはありえない」と。<sup>136</sup>



137

多くの人々にとって聞きづらいことではあろうが、原子爆弾は第二次世界大戦を終わらせるためやアメリカ人兵士らの命を救うためには必要でなかった。それどころか、原爆は、日本のキリスト教を根こそぎにして死の血盟団の「新世界秩序」計画を推し進める助けにするために開発使用されたのである。<sup>138</sup>

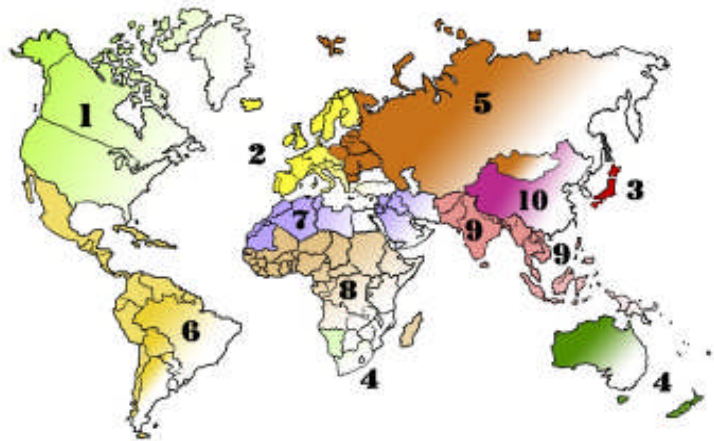
---

<sup>135</sup> 空襲による爆弾の投下と爆発を写した米国政府の映像から平和教育協会 2013 年作成。

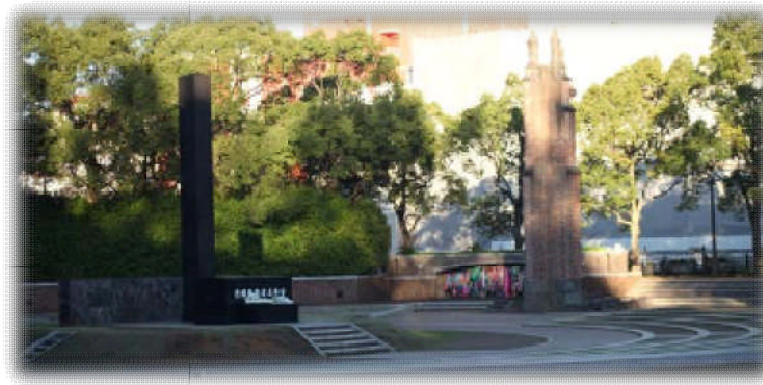
<sup>136</sup> リーヒー、前掲書、441 頁。

<sup>137</sup> 米国海軍歴史センター所蔵の映像(NH 50873)から平和教育協会 2013 年作成のウィリアム・リーヒー写真。

<sup>138</sup> 日本は、死の血盟団が世界を10地域に分ける計画の中で地域3になる。21世紀に統一世界政府の樹立を狙う血盟団の秘密計画に関連する文書では、日本の原子力発電所の設置が記述されている。死の血盟団の「武器としての気象」の技術は、原子力発電所を持った国は全て、血盟団の「新世界秩序」計画から逃れようとする「気象兵器」の標的にされて地震・津波・強風・豪雨などによる災害で潰される恐れがあることを意味する。この可能性については、既に HAARP [High Frequency Active Auroral Research Program (高周波活性オーロラ研究計画)の略称]と呼ばれる米国軍事機関が主体のアラスカなどに設置された巨大な大出力高周波電磁波放射装置等により、気象や地表層に顕著な変化をもたらす工学技術的人為操作が伝えられており、世界の有識者の関心と危惧を強めている。この実情については、「注意深きキリスト教徒」著作シリーズ第II巻(前掲書)を参照されたい。



139



140

長崎の爆心地記念碑を訪れる人は、ゼロ地点[訳注＝核爆発真下の地面]が浦上天主堂の彫像の直ぐ左側になることが分かる。<sup>141</sup> 公式に予定されていた核爆発地点は天主堂から約2マイル南であったので、この実際の爆心地こそが明白な証拠である。このことは、現地作戦命令書17号[訳注＝原文では Field Order No. 17]及び長崎原爆投下目標地図 90-36-542 で裏づけられる。<sup>142</sup> 又、スウィーニー少佐ら爆撃機搭乗員たちが、正しく定められた標的から500フィート以内での爆発とされている直撃であったと報告している。この公式標的から2マイルもはずれている事実をどう説明するのか。

<sup>139</sup> ペステル、ネササロヴィク、前掲書、17頁。十大経済圏ないし地域は、既述のように「ローマ・クラブ」によって公表されている。三次にわたる世界大戦の計画についての詳細は、平和教育協会発行のデイヴィッド・ディオニシ、アンドルー・フィリップス著『死の血盟団を打破する』[David J. Dionisi & Andrew L. Philips, *Defeating The Brotherhood of Death*, Teach Peace Foundation, 2014]を参照されたい。なお、この世界地図の色別区分上の数字が示す地域は以下の通りである。1. アメリカ、カナダ、メキシコ 2. 欧州連合 3. 日本 4. 南アフリカ、オーストラリア、ニュージーランド 5. 東ヨーロッパ、パキスタン、アフガニスタン、ロシア、そのた旧ソ連諸国 6. 中央アメリカ、南アメリカ、キューバ、カリブ海諸島 7. 中東と北アフリカ 8. 南アフリカ以外のアフリカ諸国 9. インドを含む南アジア、東南アジア 10. 中国(モンゴルを含む)。

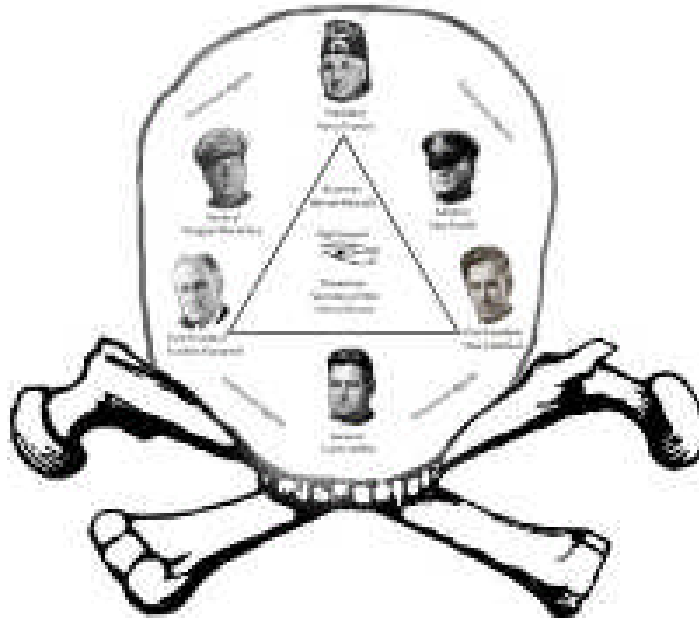
<sup>140</sup> 平和教育協会 2013年写真集より転載の長崎爆心地記念碑の映像。

<sup>141</sup> 浦上天主堂の建物は爆心地記念碑から1,800フィート離れている。長崎原爆投下作戦での公式の予定爆心地は、北緯32°44'47"、東経129°52'43"の地点で、そこは地図上では常盤橋-賑橋間の中島川上の地点になる。

<sup>142</sup> 米国国立公文書館の報告では、長崎原爆投下目標地図の原本は紛失しており探索回収を要すると伝えている。この地図とグアム島の第20空軍司令部から発令された現地作戦命令書17号は予定目標の変更を示す証拠になるので、当の目標地図紛失という事実は注目すべきことである。死の血盟団は、この地図を「紛失」させることで原爆投下の標的地点が秘密裏に変えられた事実を隠蔽しようとしたに違いない。

その答えは、浦上天主堂が秘密裏に定められた本当の爆心地であったが故に、スウィーニー少佐ら当の爆撃機搭乗員らは標的直撃を報告したのである。公式の爆撃目標地図や現地作戦命令書 17 号などは、人々に三菱の軍需工場を標的にしたのだと信じこませるために作られたものであった。

フリーメイソンのトルーマン大統領、ウォラス副大統領、ダグラス・マッカーサー將軍、ハップ・アーノルド將軍、カーチス・ルメイ將軍、そしてスカル・アンド・ボーンズのスティムソン陸軍長官はバナー・バルークに仕え、そのバルーク自身は更に死の血盟団最高幹部会に従う者であった。<sup>143</sup>



144

こうして、死の血盟団は、原爆投下目標を決定する指導部の主要な部署を確保することによって、わずか数秒で、日本で過去 500 年間にキリスト教を迫害する者たちがなしえたよりも多くのキリスト教徒を殺害したのである。<sup>145</sup>

確かに、我々は、人間として、原爆の破壊力と被爆死者数を目の当たりにすれば、一体どのような人間がこうした事態を引き起こせるのかを問わねばならない。更には、血の誓いを交わして死の血盟団に仕える者たちに原爆の開発使用の主要な地位を占めさせ、今日なお、そうした権力の座を支配させ続けていることを、我々は どうして知らないで済まされようか。

---

<sup>143</sup> ペック、前掲書、99 頁。マッカーサーは 1936 年 1 月 17 日にフリーメイソンになった。彼の入団儀式は、フレデリック・スティーヴンズ、フランシスコ・デルガド及びサミュエル・ホーソーンによって行なわれた。フィリピン大本部に所属する多くの者を含めて 600 人以上のフリーメイソン団員が、マッカーサーの入団儀式に立ち合った。更に、本書 99 頁で、ペックは、フリーメイソン成員に仕立てる少年たちを育てるために密かに設立された組織であるボーイスカウト団を通して原爆投下後の日本にフリーメイソン団が戻ってきたと記述している。

<sup>144</sup> 平和教育協会 2014 年作成の挿絵。

<sup>145</sup> ドーゼル、前掲書、193 頁。



## 朝鮮の分断

「自然との永続的な調和の下で人類を5億人以下に維持せよ」 ジョージア道標石

朝鮮がどのようにして分断されたかについては、偽りの説明が多くの学校で教えられている。学生たちは、第二次世界大戦の終了時にトルーマン大統領の部下らが朝鮮を余り重要視しなかったからだと説明される。こうした解釈は、アメリカ政府が当時フィリピンと日本の戦後処理に圧倒されていたので朝鮮の信託統治を引き受けたくなかったとの説明にもなる。その結果、二人の軍当局者デービッド・ディーン・ラスクとチャールズ・ハートウェル・ボーンスティール3世が、朝鮮を南北に分断する決定を下し、<sup>146</sup>その後このラスクとボーンスティールの分断案が、日本の占領行政を指令する一般命令1号の一項目として実施されたのだとされる。<sup>147</sup>

何故アメリカが朝鮮を分断したかについて、この偽りだが公式の説明は、北朝鮮と南朝鮮が政策意図によるのではなく偶然に作られたとする。しかし、真相は、朝鮮が世界統治計画を押し進める死の血盟団要員らによって分断された事実である。死の血盟団は、朝鮮を非常に特殊な理由で分断しようとした。まずは、「冷戦」(これはバーナード・バルークの造語であるが)を発生させるのに役立つことで、これはソ連内部の血盟団要員らがソ連に原爆を持たせることで可能になる。次いで、第二次世界大戦の終了後5年を経ても、朝鮮に局地紛争ないし戦争を起こさせることで米国の「防衛費」を高く維持できる。第三の理由は、分断朝鮮が第三次世界大戦を起こさせる死の血盟団の21世紀計画に役立つことである。

正確な説明は、バーナード・バルークら死の血盟団要員が世界的にうまく「冷戦」概念を定着させたことなどの諸事実に示されている。彼等は、首尾よくアメリカに1950年から1953年にかけて朝鮮戦争をやらせる工作をした。更に、彼等は、アメリカ政府に多額の軍事費支出を継続させるべく世論の支持を勝ち取ることに成功した。人々が偽りの歴史を受け入れ続けている限り、死の血盟団は、第三次世界大戦によって更なる甚大な苦難を朝鮮にもたらすことになるろう。

死の血盟団は、歴史の教え方を統制し、朝鮮分断の由来について偽りの説明をさせる代弁者らを支援してきている。そこでは、ラスクやボーンスティールは誰に仕えていたのか、38度線の重要性は何か、何故ドイツは日本へウラニウムを送っていたのか、そして何故長崎で1万人以上の奴隷化された朝鮮人が原爆によって殺戮されたのかなど、真実を隠蔽するために歴史上の数々の側面が一般的に歪曲されているのである。<sup>148</sup>

### 死の血盟団奉仕

ラスクは、アメリカに朝鮮とベトナムで戦争させた工作でよく知られている。彼の幾つかの血盟団偽装組織との関わりは、ローズ奨学生となり1933年に血盟団のセシル平和賞を受けるなどした

<sup>146</sup> デービッド・ディーン・ラスク [David Dean Rusk] (1909年2月9日～1994年12月20日)とチャールズ・ハートウェル・ボーンスティール3世 [Charles Hartwell Bonesteel, III] (1909年9月26日～1977年10月13日)は、朝鮮を分割した二人の人物として認められている。

<sup>147</sup> 一般命令1号は、米国軍部の統合参謀本部によって用意され1945年8月17日に米国大統領によって承認されたものである。以下は、そこからの抜粋である。—「満州、北緯38度線以北の朝鮮、及び樺太における日本軍の高級司令官と陸・海・空・補助軍の全ての部隊は、極東におけるソ連軍最高司令官に降伏すべし」と。

<sup>148</sup> 朝鮮を分断する38度線は、一般命令1号によって設定され、南北分断の境界線として1953年の朝鮮戦争休戦協定で合意された。

学生時代にさかのぼる。ラスクは、1950年から1961年までロックフェラー財団の理事となり、又外交問題評議会の一員でもあった。<sup>149</sup>

チャールズ・ハートウェル・ボーンステール3世も、ローズ奨学生であり外交問題評議会の一員であった。彼は、1931年にウェストポイントのアメリカ陸軍士官学校を卒業し、死の血盟団に対する貢献で報賞されて四つ星将官[訳注=大将の階級]で退職した。<sup>150</sup>

### 38度線の重要性

日本の原爆開発計画は、一般に知られていないが確かな史実である。1934年には東北大学の広坂忠義教授が原子爆弾を作る可能性を説明した「原子物理理論」を公表している。当時日本には「二号」と「F号」と呼ばれた二つの主たる原子力開発計画があり、<sup>151</sup> 仁科芳雄博士が理化学研究所で二号計画に取り組み、<sup>152</sup> 荒勝文作が京都帝国大学でF号計画を指導した。<sup>153</sup>

死の血盟団は、日本占領管理の一般命令1号が出される前に38度線以北の朝鮮で日本の原爆開発計画施設が設定されていたことを米国市民に知らされたならば、ソ連に核開発技術を与えることになるのを恐れた一般市民の抗議が朝鮮を南北2国に分断するのを押し止めることになるかと結論した。<sup>154</sup>

更に、この特殊原子兵器の製作関連場所の存在は、何故、日本が長津発電所ダムを建設したり、1950年11月27日から12月13日にかけての凍結した長津での戦いでアメリカ軍が不名誉な敗北を喫したのかについて手がかりを与えてくれる。<sup>155</sup> 凍結したチョシンでの戦いでアメリカ軍兵士らは、F号計画の施設となった興南地域の山岳施設を再発見している。

日本の原爆開発計画の主要部分がソ連邦の手に渡るようにと、先ずは38度線に沿って朝鮮が分断され、その後1953年には軍事境界線としてそれが固定されたのである。

---

<sup>149</sup> ラスクは、1961年から1969年まで米国国務長官であった。外交問題評議会[The Council on Foreign Relations]略称CFRは、米国政府に「新世界秩序」を狙う諸計画を推進させるよう働きかける死の血盟団の偽装団体の一つで、長年このCFR会員が米国政府の要職を制してきた。例えば、ケネディ政権の陣容では、ニューヨーク・タイムズ紙のアンソニー・ルーカスが報じるところによれば、「ケネディ大統領が国務省での属領を配置するために用意された名簿上で最初の82名のうち63人はCFR会員であった。これを見てケネディは「ここに多少は新しい顔ぶれを見たいものだが、これでは皆同じ古顔ばかりではないかと苦情を云った」ほどである。ジェイムズ・W・ワードナー著『計画されたアメリカの破壊』[James W. Wardner, *The Planned Destruction of America*, Longwood Communications, 2012]、60頁。

<sup>150</sup> ボーンステールは、1966～1969年に在韓米軍司令官兼国連軍司令官になった。

<sup>151</sup> トーマス・M・コフィー著『帝国の悲劇—信じがたい勝利から考えられない敗北へ』[Thomas M. Coffey, *Imperial Tragedy: From the Incredible Victories to the Unthinkable Alternatives*, New York: World Publishing, 1970]、244-246頁、374頁。

<sup>152</sup> 詳細については『東京新聞』2012年8月16付朝刊の記事「挫折した極秘「二号研究」」及び中日新聞社編『日米同盟と原爆—隠された核の戦後史』(東京新聞、2013年)、第1章「幻の原爆製造1940～1945」を参照せよ。

<sup>153</sup> 荒勝のF号班には1949年に物理学の業績でノーベル賞を受けた湯川秀樹がいた。

<sup>154</sup> ソ連の原爆開発を助けて確実な「冷戦」を創り出すことが、ヘンリー・スティムソンや他の死の血盟団要員らが日本に原爆を使ったことを正当化するために日本の原爆開発計画を引き合いに出さなかった主な理由でもある。

<sup>155</sup> ロバート・K・ウィルコックス著『日本の秘密戦争』[Robert K. Wilcox, *Japan's Secret War*, New York: William Morrow and Company, Inc., 1985]、27頁。日本の原爆開発の主な科学者たちのうちの二人、高橋力造と若林忠四郎はソ連の捕虜となった。

## ウラニウム輸送の理由

ナチス・ドイツの日本へのウラニウム輸送と日本の原爆開発計画は、一般に知られていない。日本の原爆作りの作業は、京都大学でのサイクロトン設置を成功させた後、あらゆる入手可能なところからウラニウムを入手することが必要であった。朝鮮北部でのウラニウム供給源が、実際の原爆資材を開発する施設を日本の本土外に求めた理由の一つである。又、興南地域が選ばれた別の理由としては、長津ダムが歴大な電力供給に適うことと、日本本土を核爆発実験による放射線被害から守るためであったろう。<sup>156</sup>

更に、日本の陸軍と海軍は、日本、ビルマ、中国でウラニウムを見つけていた。朝鮮北部は、最も有望なウラニウム供給源の一つであることが分かっていたが、より多くのウラニウムが必要であった。そこで、ナチス・ドイツは、金、生ゴム、アヘン、キニーネ、その他戦争継続に必要な資材との交換でウラニウムを日本に提供することになったのである。

ドイツの日本へのウラニウム輸送の試みは、米国政府の文書で記録されている。<sup>157</sup> ウラニウム 235 は、1945年8月6日に広島上空で爆発した原爆「チビ少年」[訳注＝「デブ男」と同様にウラニウム爆弾の形態から呼ばれた暗号名 Little Boy]に使われた核物質である。マンハッタン計画は、この原爆「チビ少年」にナチスのウラニウムを使用していたかも知れない。根拠となる証拠は、少なくとも、アメリカ海軍によって捕獲されたドイツのUボート1隻の積み荷が日本へ輸送しようとしていたウラニウム 235 であったことである。ウラニウム 235 は、ウラニウムの爆弾用濃縮度アイソトープであり、高濃縮ウラニウムとして知られている。日本へのウラニウム 235 の輸送は、ドイツではウラニウム 235 の開発はなかったとする現代版歴史に反するが、ナチスのウラニウム爆弾開発計画は、米国が二つの非常に異なる種類の爆弾、即ち1945年8月に日本で落されたプルトニウムとウラニウムの原爆をどのようにして持つに至ったかを説明するものかも知れない。

U-234号と呼ばれたドイツのUボートは、日本へウラニウム輸送途中の1945年5月14日にU.S.S. サットン[訳注＝アメリカ海軍の駆逐艦]に降伏した。<sup>158</sup> 米国政府の公式報告では、ドイツの潜水艦U-234号から没収したウラニウムについてはマンハッタン計画当局に報告されただけでロス・アラモス現地へは送られなかったとされている。この公式報告では、ドイツのウラニウムはブルックリンの保管庫に収納され、広島へ投下した原爆には使用されなかったとされている。<sup>159</sup> 死の血盟団に仕える者たちをも含めて歴史家連中は、UボートU-234号が輸送していたのはウラニウム 235 ではなく酸化ウラニウムであると云って、うまく大勢を信じこませている。

しかし、U-234号の海上での降伏は、ヨハン・ハインリッヒ・フェーラー中尉によって指揮された同艦が金で裏打ちされた円筒にウラニウムを入れて運んでいたもので、死の血盟団には幾つかの問題を引き起こした。容器を金で裏打ちしたのは、ウラニウム 235 からの放射線被曝を防ぐために必要であったからで、それは米国政府の公式説明のような不活性の酸化ウラニウム輸送には使われないのである。原子炉で濃縮されない限り酸化ウラニウムは放射線を出さず、従って金で裏打ちされた

---

<sup>156</sup> 同上。長津貯水池は興南の施設に電力を供給していた。長津或いは長津川は、長津貯水池から南へ流れ次に東へ流れる。日本人は、原子爆弾その他の戦時生産事業への電力供給を支えるために興南北方の咸鏡南道に巨大な水力発電施設を設置した。その場所の日本名は興南である。上掲書15-16頁で、ウィルコックスは、第24戦争犯罪調査分遣隊と共に朝鮮で調査活動をしたデービッド・スネル[David Snell]との面談について記述している。スネルは、興南原爆開発施設での警備担当官を含む日本の原爆計画に係わった人たち多数を面接調査しており、何人かの日本人科学者がロシアへ連行されたことを話してくれた。

<sup>157</sup> 『ナショナル・ジオグラフィック』[National Geographic] 1999年10月号所載のプリイト・J・ヴェシリンド著、「最後のD」[Priit J. Vesilind, "The Last D"]。日本国内の報道資料としては、前掲の『東京新聞』記事と中日新聞社編書22-25頁を見よ。

<sup>158</sup> 同上、134頁。

<sup>159</sup> 同上。

円筒容器は不活性な酸化ウラニウム輸送には必要ないのであるから、U-234 号の金で裏打ちされた円筒容器は極めて重要である。直接の目撃証人ヴォルフガング・ヒルシュフェルディス[Wolfgang Hirschfeldis]は、1997 年の著書『ヒルシュフェルディス—U ボートの秘密日記』[Hirschfeld: *The Secret Diary of a U-boat*]の中で、「U-235」とペンキで表記された円筒体に「U-粉末」の積荷を見たと言っている。

ウラニウム 235 を使った広島投下爆弾の完成以前にアメリカの所有となったドイツのウラニウム 235 は、およそ 7.7 ポンドであったと計量された。米国政府の公式見解では、この濃縮ウラニウムを全量使っても爆弾「チビ少年」の実験と広島で爆発させる爆弾用には不十分であったとされている。しかし、ドイツが日本へ U ボートでウラニウム 235 を輸送しようとした事実は、ドイツが少なくとも爆弾一発分の核分裂物質を有していた証拠を確かにするものである。

当時日本の潜水艦 I -52 号がドイツで受け取り日本へ持ち帰ることになっていた酸化ウラニウム 500 キログラムと恐らく一緒に積荷されていたであろう多少のウラニウム 235 に関する秘密は、今日もなお隠されたままである。I -52 号は、1943 年に日本の呉海軍造船所で建造され、燃料補給なしで 300 トンの積荷を 21,000 マイルも輸送できるように設計されていた。1944 年 3 月、I -52 は、宇野甲雄艦長、士官 11 名、下士官兵 84 名と乗客 14 人を乗せて呉港を出発して、途中シンガポールに寄港し生ゴム 54 トン、阿片 2.88 トン、キニーネ 3 トンを積み込んでいる。その後、この I -52 号には金 2 トンが積み込まれていたことも、解読された日独間の通信によって確認された。

1944 年 6 月 23 日に、I -52 号は、クルト・ランゲ大尉が指揮するドイツ潜水艦 U-530 号と会合することになっていた。この会合の通信連絡がアメリカ軍諜報部によって傍受され、A・B・ヴォセラー大佐が指揮する護衛空母 U.S.S.ボークが両潜水艦を空爆するために急派された。<sup>160</sup> ジェスイ・テイラー少佐が U.S.S.ボークから発進して約 55 マイルの海上で I -52 号と U-530 号を発見して攻撃し、日本の潜水艦は被弾して大西洋に沈没した。U.S.S.ボークは、ウィリアム・フラッシュ・ゴードン大尉が指揮する次の攻撃機を発進させて、その魚雷攻撃で U-530 号も撃沈させた。<sup>161</sup> I -52 号と積荷の金の損失は、当時日本のベルリン駐在海軍副武官の藤村義和によって確認された。その際、藤村は、「金を失ったことは辛いけど、100 人も水兵たちを失ったことは残念だ」と語っている。

深海沈没船引揚げ作業の専門家ポール・ティドウェルが、国立公文書館で I -52 号が金 2 トンを積み込んでいたことを確認した解禁文書を読んだ後、1995 年に当の沈没艦を見つける作業を始めて現在も続行しているが、未だ金が回収されたとの報道はない。

要するに、日本の原爆開発計画は、アメリカのマンハッタン計画よりかなり遅れてはいたが、1945 年の時点ではヨセフ・スターリンにとって大きな価値があった。スターリンは、死の血盟団に仕えてはいたが、原爆製造に必要な技術や資材をアメリカから与えられることを 1945 年には確信できなかった。『ジョーダン少佐の日記から』と題する本は、死の血盟団要員のハリー・ホプキンスがソ連政府に原爆製造に必要な計画と資材を受け取らせる手配をしたと記述している。<sup>162</sup> ホプキンスは、トルーマン政権がスターリンに国家最高機密である原爆情報を届けるのに使った人者であるとジョージ・ジョーダン少佐が暴露したのである。<sup>163</sup>

---

<sup>160</sup> 同上、119 頁。主要人物の写真と嘗ての極秘攻撃計画が <http://www.i-52.com/> に掲載されている。

<sup>161</sup> 同上、124 頁。潜水艦 I -52 号については、前掲の『東京新聞』記事と中日新聞社編書 22-25 頁を参照せよ。

<sup>162</sup> ジョージ・レイスイ・ジョーダン少佐著『ジョーダン少佐の日記より』[Major George Racey Jordan, *From Major Jordan's Diaries*, New York: Harcourt, Brace and Company, January 1, 1952], 24-26 頁と 30-38 頁。ハリー・ロイド・ホプキンス[Harry Lloyd Hopkins]は、ルーズヴェルト大統領の最高外交顧問で、第二次世界大戦中にソ連政府要人らとの交渉を担う米国側の代表責任者であった。269 頁では、ジョーダン少佐は、ハリー・ホプキンスがソ連への武器貸与援助で 110 億ドル以上の出荷を指図したと記述している。ソ連に米国の極秘通信情報を提供したホプキンスの仕事については、前掲書「注意深きキリスト教徒」著作シリーズ第 II 巻で記述されている。

<sup>163</sup> 同上書(ジョーダン少佐)、5-6 頁、32-35 頁、38-39 頁、86、96-122 頁、235-237 頁。なお、ハリー・ホプキンスについての追加情報は、同じく「注意深きキリスト教徒」著作シリーズ第 II 巻を参照されたい。

## 暗殺—如何にして秘密が守られたか

「暗殺は検閲の極端な形態である」<sup>164</sup> ジョージ・バーナード・ショウ

宣伝工作が失敗して真実が漏れ始めた時には、暗殺者が動き出した。二つの極秘計画、アルソス工作とブラッド・ストーン作戦の存在が1976年の米国議会上院チャーチ委員会の調査で判明した。ボリス・セオドル・パッシュ大佐は、マンハッタン計画の主任防諜要員であり、アルソス工作とブラッド・ストーン作戦の責任者でもあった。<sup>165</sup> 彼は、1976年のCIA要員らによる不法殺人事件について米国議会上院議員らに尋問されているが、これは、死の血盟団が議会の調査を制しきれなかった稀な事例の一件である。<sup>166</sup>

チャーチ委員会による死の血盟団に対する損傷が余りに大きかったので、フリーメイソン団員で時の大統領ジェラルド・フォードは急遽スカル・アンド・ボーンズ成員のジョージ・H・W・ブッシュを在中華人民共和国米国連絡事務所長からCIA長官に移動させることになった。<sup>167</sup> そこで、ブッシュは死の血盟団のために事態の收拾を図る任務を与えられたのである。

<sup>164</sup> ジョージ・バーナード・ショウ著『ブランコ・ボスネットの晴れ姿』[George Bernard Shaw, *The Shewing-up of Blanco Posnet*, 1909]、序文。[http://en.wikisource.org/wiki/The\\_Shewing-upofBlanco\\_Posnet/Preface](http://en.wikisource.org/wiki/The_Shewing-upofBlanco_Posnet/Preface) に掲載。

<sup>165</sup> クリスファー・シンプソン著『撥ね返り—アメリカのナチス登用と冷戦への影響』[Christopher Simpson, *Blowback: America's Recruitment of Nazis, and Its Effects on the Cold War*, New York, Collier Books, 1988]、153頁。シンプソンは、PB/7 と呼ばれたパッシュのCIA 5人編成工作チームが「暗殺、誘拐、その他時に応じて上部筋から…指図される工作任務に対して」免責特権を与えられていたと言及している。

<sup>166</sup> 『チャーチ委員会報告、第IV巻』[*Church Committee Report, Book IV*]、129頁。パッシュは、1949年まで長年にわたり秘密工作員であり、1949年3月3日から1952年1月3日までは正規にCIAに所属していた。彼は、この正規CIA所属期の前後にも幾つかの秘密任務を遂行していた。

<sup>167</sup> 当時米国は中国に大使館を持っていなかったため、大使の呼称は使われなかったし、そこでのブッシュの役割は、米国大使ではなく死の血盟団の対中国大使として理解されるのが最もふさわしい。ジョージ・H・W・ブッシュ自身は、1976年1月30日にCIA長官になるまでCIAにいたことは全くないと偽りを言い続けていたが、彼は1948年にCIAに入ったのが真実である。その背景としては、彼がエール大学在学中にスカル・アンド・ボーンズに入っていたことにつながる。当初、死の血盟団がブッシュにやらせた仕事の一つが、CIA要員になり、1951年にブッシュ-オーヴァビー石油開発会社[Bush-Overby Oil Development]を、1953年にはザパタ石油会社[Zapata Oil]を始めることであった。同じCIA要員のトマス・J・ディバイン[Thomas J. Devine]が、その主なパートナーであった。1954年には、ザパタ沖合会社[Zapata Off-Shore Company]がザパタ石油の子会社として設立された。その後1959年に、ザパタ石油会社は分割されてザパタ石油会社[Zapata Petroleum]とザパタ沖合会社[Zapata Off-Shore]になった。更に1960年には、死の血盟団は、ザパタ石油を諜報謀略機関の偽装会社であると見抜かれることを払拭するために、ブッシュを使って他のCIA要員エドウィン・ポウレイ[Edwin Pauley]と共にパーフォラシオンズ・マリナス・デル・ゴルフ社[Perforaciones Marinas del Golfo] (略称パーマルゴ[Permargo])として再設立させた。ザパタ社は、CIAの偽装会社を超えるもので、1961年4月の失敗したピッグズ湾侵攻作戦や1963年のジョン・F・ケネディ暗殺で死の血盟団の主要な実行犯集団の一つとして工作活動をした。なお、ジョージ・H・W・ブッシュをケネディ大統領の暗殺に連座させる重要な事実が、現在解禁されてFBIの公開記録文書に加えられている。このブッシュがマイアミで親カストロ派キューバ人グループにケネディ大統領暗殺を指図しようとしたことを示す1963年11月29日付の解禁FBI内部文書は[http://www.theseecretofnagasaki.com/BushJFKNov291963\\_document.gif](http://www.theseecretofnagasaki.com/BushJFKNov291963_document.gif) に掲載されている。彼のケネディ暗殺における役割は、ジェームズ・パロットがケネディ大統領殺害に関与していたとの偽情報を流したことなども含まれる。この場合も、ジェームズ・パロットがケネディ暗殺に直接関与していなかったことを証明するのは容易であった。ジェームズ・パロットについては、後年ブッシュを大統領にする支援活動を推進した者たちの中に同名人物がいて注目され、彼はまさにその者であったと信じられている。

死の血盟団に仕える歴史家らは、多くの理由でパッシュの活動を秘密にしておきたいと望んでいる。パッシュは、血盟団の秘密を明かした人たちを沈黙させる任務を担った主要人物の一人であったし、彼が指揮した暗殺計画のブラッドストーン作戦は、非協力的な科学者たちや血盟団の秘密を暴くような真つ当な人々を排除したのであり、そうした秘密の中には日本のキリスト教を潰す計画なども含まれていた。

5人編成のブラッドストーン作戦「清掃人チーム」は、証拠隠滅を図る暗殺者集団で、PB/7と呼ばれた。<sup>168</sup> 死の血盟団が問題視した人たちの多くは永久的に黙らされたが、血盟団にとって人格暗殺が著名な地位身分にある者を引き落とすのにしばしば理想的な方法であった。パッシュの最も知られた人格暗殺の一つは、J・ロバート・オッペンハイマーを共産党同調者として告発して抹殺した事件である。作家のクリストファー・シンプソンは、「世間によく知られた 1954 年の治安事件でオッペンハイマーの運命に封印させたのは」パッシュ大佐の証言であったと述べている。<sup>169</sup>

それにしても、日本帝国軍隊の犯罪行為やその他第二次世界大戦中のおぞましい出来事は、映画・本・コンピューターゲームなどで広く宣伝されてきたが、第二次世界大戦を舞台とする映画・演劇・小説・テレビゲームなどで、こうした前代未聞の卑劣な行為、破滅した人々を更に押し潰す残虐行為、広島や長崎への原爆投下のように人間がこれまで犯した最も短時間の大量殺人行為などには最近まで全く触れられていないのは不可解な事実である。

悪魔が弄した最悪の詐術は、世界中に悪魔は存在しないと信じこませたことだと云われてきた。しかし、今や本当の問題は、実際に組織された邪悪が存在することを知った以上、それに対して我々自身が何をなすべきだと思ひ望むかである。

---

<sup>168</sup> シンプソン、前掲書、26 頁、152－153 頁。『チャーチ委員会報告』[前出]及び統合戦略計画委員会[Joint Strategic Plans Committee]、JSPC 862/3。国務・陸軍・海軍・空軍間調整委員会[State-Army-Navy-Air Force Coordinating Committee (SANACC)] 395, 文書 8 [Document 8]。国務・陸軍・海軍・空軍[State Army Navy Air Force (SANA)] 6024, 1948 年 4 月 15 日付委員会委員任命[Appointment of Committee]及び統合戦略計画委員会、JSPC 862/3。

<sup>169</sup> 1954 年 6 月 2 日付『ニューヨーク・タイムズ』1 面以下に続くジェイムズ・レストン[James Reston]記者の記事「オッペンハイマー博士は、”忠実ではある”が”不信用である”として国家機密事項取扱許可を剥奪」[Dr. Oppenheimer is Barred from Security Clearance, Though 'Loyal,' 'Discreet,' " *New York Times*, 2 June, 1ff.]。オッペンハイマーは、知らずして死の血盟団の手駒になっていたが、危険人物とみなされて指弾され、科学者として事実上抹殺されて、水素爆弾の製造に反対する有力な声になる彼の能力を不能にされたのである。

---

 未来

「暗闇は暗闇を追い払うことができない。光だけが暗闇を取り除けるのである。憎しみは憎しみを追い払うことができない。愛だけが憎しみを追い払えるのである。憎しみは憎しみを増やし、暴力は暴力を増やす。そして、強さは破壊の下降渦巻きの中で強さを増し…憎しみが憎しみを生み、戦争がより多くの戦争を生むような悪の連鎖反応は、粉碎されなければならない。さもなくば、我々は絶滅の暗く深い穴に落されるであろうから」<sup>170</sup>

マーティン・ルーサー・キング2世 博士



171

長崎の秘密、罪なき人々の無情な殺戮、原爆を使って日本を凶悪な世界統一政権の第三地域に落とし入れようとしたことなどを知った今、我々は、自分たちが一つの扉の前に立っていることが分かる。<sup>172</sup> そこでどうするか、一つの選択は、扉を閉じたままで、見て見ぬ振りをして過去を忘れ、闇の力に日常を支配され続けながら、彼等の悪の計画や策略の犠牲にならないよう或いは長崎・広島・ホロコーストのような出来事の被害者には決してならないであろうとの偽り希望を抱いて生きることである。

しかし、もう一つの選択として、扉を開いて中に入り、多少の勇気と粘り強さを持って死の血盟団に立ち向えば、奴等を打ち負かすことが出来るのではないか。

我々は、闇の権力の存在を知り彼等の行動を暴露することによって、アメリカ国民に、これは彼等自身や彼等の両親、或いは彼等の祖父母たち、はたまた彼等の国が犯した罪ではなく、それは地球人口の0.001%にも及ばない連中の集団が犯したことであり、奴等は未だ厳然と邪悪の意図をもって存在するが、我々が一緒になって立ち向えば奴等の邪悪な行動を阻止できることを伝え知らせるのである。

---

<sup>170</sup> マーティン・ルーサー・キング2世著『愛する力』[Martin Luther King, Jr., *Strength to Love*, New York, Harper & Row, 1963]。

<sup>171</sup> 平和教育協会 2013 年作成の挿絵。

<sup>172</sup> スカル・アンド・ボーンズのジョージ・H・W・ブッシュ大統領は、1991年3月6日、米国議会両院合同会議で演説して、この扉ないしそれらしきことを引き合いに出して湾岸戦争の終結を宣言し、そこで次のように述べた—「今や、我々は新たな世界の出現を見ることが出来る。それは、新たな世界秩序の極めて現実的な展望が開ける世界である」と。



173

長崎自体が、これを証明する事実である。丁度イエス・キリストが十字架から立ち上がったように、長崎は灰墟から立ち上がり再び繁栄を続けている。日本では、キリスト教徒は 19 世紀まで迫害されたが、その後は第二次世界大戦以前でも少なからぬキリスト教徒の総理大臣を輩出するなど、信仰の自由を享受した国であった。このことを知ると、欧米諸国の人々は驚くのである。<sup>174</sup>



175

---

<sup>173</sup> 平和教育協会 2013 年写真集より転載の再建された浦上天主堂。

<sup>174</sup> ケアリー、前掲書、315 頁。ローマ・カトリック教徒の総理大臣は 3 人出たが、その中の原敬は 19 代目、吉田茂は 49 代目、麻生太郎は 92 代目の総理大臣であった。プロテスタントからは 5 人の総理大臣が出ており、その内の高橋是清は 20 代目、片山哲は 46 代目、鳩山一郎は 52 代目、大平正芳は 68-69 代目、鳩山由紀夫は 93 代目の総理大臣であった。皇室からの総理大臣は東久邇宮稔彦(1887 年 12 月 3 日～1990 年 1 月 20 日)だけであるが、彼は 1945 年 8 月 17 日から 1945 年 10 月 9 日まで第 43 代総理大臣を務め、皇室を保護するために原爆投下直後の日本政府で中心的な役割を果たした。昭和天皇が生き延びて諸々の戦争犯罪に対する責任を問われないようにするために、太平洋戦争中に多数の国々から強奪した金やその他の貴金属の大半が死の血盟団に提供されたのである。「黄金の百合作戦」[Operation Golden Lily]と名づけられた皇室の犯罪計画は、「注意深きキリスト教徒」著作シリーズ第 IV 巻で記述されている。

<sup>175</sup> 平和教育協会 2013 年写真集より転載の長崎の夜明け。



今日までのところ、日本はキリスト教徒の首相を8人も輩出している。又、原爆でキリスト教徒が酷く犠牲になったにもかかわらず、キリスト教は復興を続けてきた。現在日本でのキリスト教徒は約300万人であると推定されている。<sup>176</sup>

アメリカ先住民たちには次のような名言がある—「世界は我々のものではない。我々は唯我々の子供たちからそれを借りているだけなのだ」と。

長崎の秘密を知ることによって、我々は、偏ったメディアにより供給される腐敗堕落した政治家らの虚言や宣伝が、如何に我々を駆り立てて他の人々を殺戮し破滅させることができるかを知らされるのである。



177

これは明らかに間違っており許容されるべきではない、と我々は心の底から判断する。我々が全ての人の命を尊重することを学べるならば、我々の子供たちも同じようにできるであろうことを我々は知っているのである。<sup>178</sup>

---

<sup>176</sup> <http://www.state.gov/j/drl/rls/irf/2007/90138.htm> に掲載の米国国務省民主主義・人権・労働局[Bureau of Democracy, Human Rights, and Labor]による『国際信仰自由報告 2007 年』[International Religious Freedom Report 2007]を参照。なお、2013 年の日本の総人口は1 億 2,800 万弱であった。

<sup>177</sup> 平和教育協会 2013 年写真集より転載の長崎の夜明け

<sup>178</sup> 長崎の多くの人々、世界中の多くの人々は、原子兵器が再び使われることを防ぐには真実が必要であることを理解している。ごく少数の米国市民しか存在を知らなかった新破壊装置 Z マシンと核実験の継続に対する広島市長のアメリカ大統領宛抗議文は、今なお真実の抑圧・隠蔽・歪曲が続いていることを改めて我々に伝えてくれるのである。

---

2013年8月20日

アメリカ合衆国大統領  
バラク オバマ 閣下

### 抗議文

貴国は、本年4月から6月の間にニューメキシコの実験場においてプルトニウムを用いたZ-マシーンの実験を再度行ったと発表しました。

これらの繰り返し行われたZマシーンと未臨界核爆発の実験は、我々をして、貴国は我々の平和への念願を無視し無期限に核兵器の蓄積保有を固持し続けるつもりであると信じさせるのであります。実に、これらの実験は、閣下の意図に対して喚起される疑念と共に、核兵器なき世界を願い求める広島や他の何百万と云う人々の希望を裏切ったのです。このような行為は、全く受け入れられません。原爆被災都市の広島を代表して、私は断固として抗議します。

閣下は、この6月に核兵器の更なる削減交渉の開始をロシアに呼びかけて核軍縮への決意を表明されたにも拘わらず、核実験を行い続けている事実に対して、私は激しい憤りを覚えるのです。我々の希望を裏切ることを止めるよう強く求めます。どうか、原爆被災地の生存者たちの苦痛極まりない経験を慮り、平和への彼等の心からの願望を理解し、そして核兵器なき世界を一日も早く実現するようご尽力下さい。

広島市  
市長 松井一實

## 付 録 A

### 「注意深きキリスト教徒」 著作シリーズ

多くの人々に死の血盟団の組織化された悪が存在する事実を具体的に証明するには、一冊の本で十分であるが、その組織と行動の実態を色々な側面で明かにすることで、我々は、更によく世界を理解し、子供たちの安全を守り、神に対する信仰を深められるであろう。

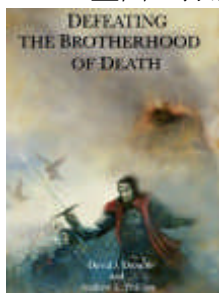
以下に紹介する「注意深きキリスト教徒」著作シリーズは、血盟団がこれまで世界中で惹き起してきた重大で忌まわしい出来事を詳細な証拠資料をもとに緻密に分析して啓発的な解説を書き綴った斬新な企画である。

この綴織のような著作シリーズに一貫した対象題材の一つは金(ゴールド)であるが、それは「新世界秩序」を追求する血盟団が金銭に象徴される富を非常に欲求し更に強く狂信的に金を欲求するからである。「注意深きキリスト教徒」著作シリーズの第Ⅰ巻『新世界秩序』では血盟団による金の市場価格操作が説明され、第Ⅱ巻『アメリカの広島を防ぐ』では金が如何に偽旗作戦 [“false flag operations”一訳注=相手の旗を振って騙まし討ちにすることから転じて、相手が信じやすい偽装をして目的を達成しようとする作戦]の資金として使われるかが説明され、第Ⅲ巻『9-11 事件犯人らのオカルト信仰』では「新世界秩序」教における金の精神的重要性を解説し、第Ⅳ巻『秘密戦争』では血盟団が如何に 9-11 事件を引き起し演出したかを説明して第二次世界大戦中の「黄金の百合作戦」と 2011 年 9 月 11 日の世界貿易センター第 7 ビルの崩壊工作との類似性を解説し、第Ⅴ巻『完全な金銭運用法』では死の血盟団により支配された通貨体制が説明される。

「新世界秩序」を理解するためには、その起源と現代にかけての継続的發展、そのオカルト信仰、通貨体制の支配、そして現在進行中のアメリカ合衆国その他全ての個別統一された国家社会を解体して血盟団が支配する世界統一国家に仕立て上げる策謀計画とその実行形態を理解せねばならない。このために、以下簡略に紹介する著作シリーズが役立つことを願っている。

#### 書 題

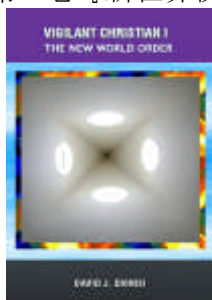
『死の血盟団の打破』



#### 概 要

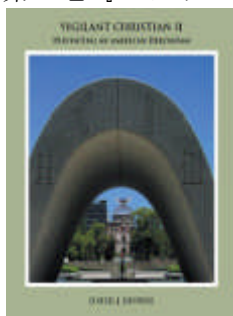
平和教育協会が提供する平和教育の導入用に最適の書で、以下の著作シリーズに関連した必読参考書である。本書は、読者に『長崎の秘密』の理解を深め、更に世界観の修正・変革を迫るものとなる。

「注意深きキリスト教徒」著作シリーズ  
第Ⅰ巻『新世界秩序』



「新世界秩序」の起源とその歴史的展開を分析し解説する。死の血盟団の確たる情報資料とその主要な代弁者たちから得られた具体的な証拠を示しながら、古代エジプトの神秘宗教を継承する現代諸々の秘密結社の組織的動向を分析する。

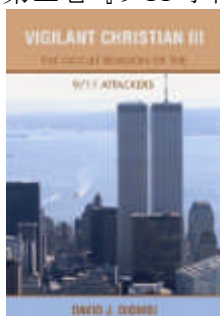
「注意深きキリスト教徒」著作シリーズ  
第Ⅱ巻『アメリカの広島を防ぐ』



死の血盟団の企ては、計画的な社会混乱によって押し進められる。混乱を巻き起こすことによって、人心を恐怖に追い込み清明な思考を麻痺させて漸増的に邪悪を引き入れるのである。

血盟団の最重点の攻め所の一つは、人々の基本的人権を擁護する権利章典を撤廃してアメリカを弱体化することである。アメリカに第二の広島を演じさせないためには、血盟団が如何にして世界中に「テロ」の脅威を蔓延させたかを説明し、早急にアメリカの広島化を防止する対策を講じることである

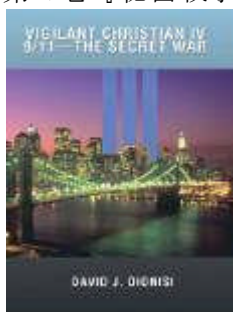
「注意深きキリスト教徒」著作シリーズ  
第Ⅲ巻『9-11 事件犯人のオカルト信仰』



死の血盟団の宗教的意図は、物質的動機づけを超越している。9-11 事件の犯行を分析すると、それが産油諸国を圧迫することよりも精神的目的の達成を狙ったものであることが明らかになる。

「新時代」を志向する血盟団の信仰が分かれば、読者は、何故ハリウッド製造の作品が盛んにオカルトものを売り出すかが理解でき、如何にしてそうした醜悪で忌まわしい興業作品から子供たちを守るかを考察できるであろう。

「注意深きキリスト教徒」著作シリーズ  
第Ⅳ巻『秘密戦争』



人々が 9/11 テロ事件は死の血盟団の行為である事実を知ると、清明な思考判断力を蘇らせることができる。

死の血盟団は、キリスト教徒、イスラム教徒、ユダヤ教徒を分断し相争わせて滅亡させるために 9/11 事件の謀略を強行した。これら三宗教共通の始祖であるアブラハム信仰が、血盟団の追求する専制全体主義の世界統一政権樹立の企てに対する主要な反対者となるからである。

「注意深きキリスト教徒」著作シリーズ  
第Ⅴ巻『完全な金銭運用法』



死の血盟団によって支配される通貨金融体制の下での資産運用法を説明する。そこで提供される諸々の助言は、読者の財政的な安定を達成する助けになろう。

惜しみなき贈与と社会に役立つ投資が本書を通しての主題なる。又本書は、読者が神の与えてくれる資源や資産を家族とその将来のために如何に賢明に使うことができるかを思索し判断する助けとなる。

なお、以上の各巻は、インターネット上の <http://shop.teachpeace.com> か [contact@teachpeace.com](mailto:contact@teachpeace.com) への電子便(e-mail)で注文し購入できます。又、全巻同時注文には割引価格で販売します。

これらの「注意深きキリスト教徒」著作シリーズの各巻は、読者の皆さんに、暗闇の中の明かりとなり、見えない蔭の邪悪な諸勢力に光を当てて彼等を照らし出し、我々全ての人々が分かち合っ  
て生きるこの世界を邪悪な闇の諸勢力から守り抜く知識と知恵と行動能力とを備えもつ助けにな  
ると願っています。